37 道品ハンドブック

レディ・セヤドー

翻訳：Paññādhika Sayalay

目次

第一章 2
第二章　四念住 2
第三章　四正勤 8
第四章　四神足 21
第五章　五根 26
第六章　五力（balāni） 33
第七章　七覚支（Sambojjhaṅga） 39
第八章　八正道（Maggaṅga） 43
第九章　如何にして 37 道品を修行するのか 49
第十章　仏法の遺産 51
＜付録一＞ 第十一章　「無我」を証入する利益 63

第一章

今、私は 37 道品（＝菩提分）について、簡潔に説明したいと思う。この 37 道品は、禅定と直観（＝vipassana。以下、vipassana）の修行者で、精進と決意を持って修習したいと思い、現世における仏法の中において、再び人類として再生したいと願う（＋者に）、殊勝なる機縁を提供するものである。簡単に言えば、37 道品は、七つのグループによりなり、それはすなわち：

１、四念処（四念住）。
２、四正勤。
３、四神足。
４、五根。
５、五力。
６、七覚支。
７、八聖道支
である。

定義によると、37 道品が「道品」とよばれる所以は、それらが「聖道智」の構成要素であり、「聖道智」は、足処（最も近い因）であり、資糧であり、根機であるからである。

第二章　四念住

「念住」の定義とは、全心全意（＝全身全霊）でもって、落ち着いた気持ちで以て、警戒心を持って、目覚めている事、である。合計四種類の念住がある。すなわち：

一、身念住
二、受念住
三、心念住
四、法念住

一、身念住：その意味は、全身全霊で、身体上に起こる現象に安住する事。例えば呼気や吸気。
二、受念住：全身全霊で感受に安住する。
三、心念住：全身全霊で（+己の）思想または精神的変化に安住する。例えば貪があるか、または貪から離れているか等。
四、法念住：全身全霊で、法を観ずる事に安住する。例えば五蓋など。

この四種類の念住に関して、もし、全身全霊で身体のある部分に安住するならば、たとえば、呼気と吸気などであるが・・・それは一切の事物に安住した事になる。というのも、修行者は、己自身の願望に従って、何か一つの対象に専注することができるが故に。「安住」とは、一人の修行者が、呼気と吸気において、一時間専注したいと思う時、この時間内において、彼の専注力は、呼吸の上において、安定的に固定される事を言う。もし、二時間専注したいと思うならば、彼の専注力は、二時間、安定的に固定される。（＋安住する修行者においては）思考と情緒が不安定（尋、Vitakka）であるが故に専注力が彼の決めた対象から離れるという、そういう状況は発生しえないのである。
四念処の詳細な論述については、《大念住経》（長部第 22 経）を参照の事。

では、なぜ、（＋修行者は）心を呼気と吸気の安住させて、その他の対象に堕ちこまないようにするのか？　我々は、集中して、「六識」をコントロール（制御）しなければならないからである。というのも、「六識」は、過去の無数無尽の輪廻の中でいつも、騒騒しく流動し続けているからである。私はもう少し、詳しく述べてみたいと思う。
心霊（＝心）は、「六根」の六種類の対象の内を、一つの対象からもう一つの対象へと、迅速に向かう習慣を有している。たとえば、心霊をコントロール（制御）できない精神病患者は、食事の時間がきてもよく理解できず、何等の目的もなく、あちらこちらに漂い歩く。父母は、彼を探し出して、彼に食事をさせようとするが、彼は、五、六口食べると、食器をひっくり返し、ぶらぶらと出かけてしまう。故に、彼は、しっかりと食事をとることができない。おしゃべりをしている時も、彼は、完璧にすべての話を話し終えることができない。彼の話は、何等意味が無く、世間的な仕事をこなすこともできず、仕事を完成させる事もできない。この種の人間は、完全な無知の中にいるのだと言える。

もし、この精神病患者が、一人の優秀な医師に出会い、かつ正しい治療を受ける事が出来るならば、たとえば、彼を入院させ、治療したならば、彼をして、精神の正常な人に、変えることができる。このように治療する事ができたならば、彼は食事をする時も、心をコントロール（制御）することが出来、そうすれば、お腹一杯食事をとる事もできる。他の物事に対しても、彼は簡単にコントロール（制御）する事ができるようになって、仕事も出来るし、話をする時も完璧になる。これが一つの例である。

この世界において、心智が散乱している人は、心神が喪失した人のようで、それは禅定と vipassana　ができるようになるまで続く。（＋心智が散乱している人は）上述した精神病患者のように、食事をしようとしても、５、６口食べただけで、フラフラと外へ出てしまうような状態の人と、同じである；これら心智が散乱する人、彼らの心念は、四方へ漂い出る。というのも、彼らは（＋心を）コントロール（制御）する事が出来ないが故に。

彼が仏陀に敬礼して、仏陀の殊勝な特徴を憶念する時、彼はこの神聖なる特徴に、心念を置いておくことができないで、（＋心は）他の考え事、他の対象に逃げ込もうとしてしまう。そういう事であるから、「iti　pi　so・・・」（世尊はまことに・・・）の偈を最後まで誦る事もできないのである。

同様に、ある種の修行者は、斎戒日に、静かな場所を探して、身体の 32 の部分、たとえば「頭髪」「体毛」等を観想しようと計画したり、また、仏陀の神聖なる特徴を憶念しようと計画するが、しかし、友達と一緒にいるがためにそれが中断されてしまう。これは、彼らに心念をコントロール（制御）する力がないために、情緒の起伏を許すからである。彼らが読経の活動に参加する時、たとえば、彼らをして心を、四無量心における禅定に向けさせるようにするとしても、また慈悲の経文を誦するにしても、彼らは、彼らの心をコントロール（制御）することはできない。思考は集中する事ができず、（＋心は）目的もなく漂い出て、彼らはただ表面的な読経活動でお茶を濁すのみなのである。これらの事実から、我々は、多くの人々は、悪業に従事する時、心智が不健全な人と、極めて似ていると言わざるを得ないのである。「心は悪を喜ぶ」《法句経》

”急ぎ善をなし、罪悪心を静止せよ。善をなすに怠慢な者は、その心は、悪に喜ぶ。”ちょうど、水が高いところから低いところへ流れるように、有情の衆生は、もし、心を制御することがないならば、自然に悪へと向かってしまう。これは心の（＋本来の）傾向である。今、私は以下のような幾つかの例を述べて、心をコントロールできない人間と、上に述べた、心智が不全な人の比較をしてみようと思う。

《願以此功徳　正法久住　早日証涅槃》

ここに一本の急流がある。どのように舵をとればいいのかよく分からない船頭がいて、急流にそって流れ下っている。彼の船は、下流の町々で必要とされている商品を満載している。彼は流れに沿って下っていくが、両岸は森林地帯で、碇を下ろして貨物を下ろすことができない。彼は岸につけることができないが故に、引き続き流れに沿って下って行った。夜になると、彼は船を泊めることのできる岸を持つ町に到着したが、暗闇の中にいるため、これらの町々を見ることができず、仕方なく、引き続き流れに沿って下って行った。夜が明けて、町に着いたが、彼には、船を岸につける技術がなく、岸辺に向かって船を漕ぐことができない。故に、彼は仕方なく、流れに沿って下って行き、最後には海に出てしまった。

止まることを知らない輪廻は、ちょうどこの急流のようで、心念をコントロールする能力を有しない衆生は、ちょうどこの船頭と同じであり、心は船である。仏法のない「空（空白）」の世界において、ある種の存在から、もうひとつ別の存在へと漂流する衆生

は、ちょうど、船頭が、船を動かす途中において、山や谷、森ばかりの場所で、船を接岸する岸がないのと、同じようである。あるときには、仏法の存在する世界に生まれながら、それを認識する機会がない。というのも、彼らは「八難」の中にいるが故に。

それは、ちょうど船頭が、岸を有する町に来ていながら、夜が暗いために、法を見分けることができない、のと同じである。あるときには、彼らは仏法のある中で、人類、天人または梵天に生まれるが、しかし、彼らは己の心をコントロールできない上に、四念住のヴィッパサナ法門を、継続的に修行する努力をしないが故に、引き続き、輪廻の中で漂っているのである。彼らは、町に有する岸を確認しながら、舵を切って接岸する能力がない船頭のように、仕方なく、大海へと向かってしまう。

無尽の輪廻のうちに、仏法のある時代に生まれ、世間的な病苦の中から解脱する衆生の数は、ガンジス川の岸の砂粒の数より多いが、これらの衆生は、四念住の修行を通して、心をコントロールする能力を有しており、かつ、心念を、何か己が意識的に注意したい対象に置くことができる。これはちょうど、四念処の修習をしていない衆生が、フラフラと漂泊する傾向またはそのような存在の傾向を表しているのである。
彼らが、禅定と　vipassana　の修習を始める時、その時初めて、（＋己が己の）心念をコントロールする能力がない事に気がつくのである。このような事柄は、牡牛を訓練して、畑を耕せるようにしたり、牛車を引いたりできるようにしたり、または大象を訓練して、国王の使役に供するとか、戦場で戦えるようにする、などの比喩で説明することができる。

牡牛の例で言うと、幼い子牛は、放牧もしなければならないが、また、牛小屋に繋がなければならない。その後に、鼻索を鼻の穴に通し、かつ、木に縛り付けて、綱の長さより遠くへは、行けないようにする。次に、軛をつけて訓練する。牛が、軛の重さに慣れて初めて、畑に行って耕耘したり、車を引いたりすることができ、この事によって、市場において売りに出すことができ、その時、あなたは利益を得る事ができる。これは牡牛の例である。上記の例では、この飼い主の利益と成就とは、牡牛に訓練を受けさせ、軛を受け入れた後、耕作や車引きの仕事に従事できるようにすることである。今、仏法の時代に身をおく凡夫と比丘、我々の真実の利益とは、禅定と　vipassana　の訓練を受け入れることである。

現今の仏法（＋の存在する）時期において、「戒清浄」を修習する事は、ちょうど子牛を訓練する時、先に牛小屋に入れておくのと同じ事である。もし、幼ない子牛を、牛小屋に閉じ込めないならば、彼は他人の財産を損壊し、飼い主に面倒を齎す。こうした事から、もし、一人の修行者に「戒清浄」が欠けるならば、三業（身業、口業、意業）

は蠢き、世間的な邪悪に順じて、「法」で述べる所の明確な悪業をなしてしまう。「身念住」を開発する努力は、ちょうど子牛の訓練の為に、鼻の穴に縄索を通し、杭に縛り付けるのと似ている。牛用の杭に子牛を縛り付けたならば、飼い主がどこへ行こうかと思えば、子牛もついて来て、どこにも逃げる事ができなくなる。このように、「念住」というこの縄索でもって、心霊（＝心）を身体に繋ぎ止めておけば、心霊は四方に漂う事はなく、主人の欲する所に基づいて、どこにいこうかと思えば、そこに附いて来るのである；（＋この時）無尽の、止まることを知らない輪廻の中における、心霊の迷い乱れる習慣は、止む。

一人の修行者が、もし、先に身念処を修習しないで、禅定と vipassana の修習をするならば、それはちょうど、鼻索を取り付けていない牡牛が畑に行って耕耘するとか、または牛車を引っ張るようなもので、その時飼い主は、己の希望にそって牡牛を使役できない事を発見するであろう。というのも、この牡牛は野生的で、鼻索を取り付けていない為、逃げ出そうと思って暴れたり、牛軛を壊して、軛から自由になろうとするのだから。反対に、一人の修行者は、心霊（＝心）を転換させて、禅定と vipassana を修習する前に、先に身念処の観想を行い、心霊を浄化し、心霊を静めれば、彼の専注力は安定し、修行の度合いは、非常に大きな成就が得られるものである。大象の例では、森林から連れ出したばかりの野生の大象は、訓練を受け入れる前、さきに（＋柵の中に）しっかりと、閉じ込めておかねばならない。

大象が完全に馴らされ、柔和になり、その他の多くの仕事に従事するよう訓練して初めて、国王の為の仕事もこなすことができるようになる。そのようになった時、大象は正式な場所において、使役され、または戦場で戦うことができる。快楽の感受の領域では、ちょうど一頭の野生の大象が、森林の中で、己一人で（＋自由を）楽しんでいるようであると言える。仏法は、ちょうど森林から連れ出されたばかりの野生の象が入れられる訓練場のようである。心霊（＝心）は、凶暴な象のようである。仏法における「信心(=確信)」と「意欲」は、ちょうど野生の象を訓練する為に連れて来る所の訓練場のようである。「戒清浄」は、木柵で囲った訓練場のようである。身体または身体の部分、たとえば、呼気と吸気は、ちょうど象を囲い込む木の杭のようである。

身念処は、ちょうど野生の象を縛り付ける杭に取り付けた縄索のようである。禅定と vipassana に向かう前の加行は、ちょうど象の予備的訓練のようである。禅定と vipassana の修習は、ちょうど国王の遊行・儀式または戦場のようである。色々な観点について、今は（＋私の記述によって）簡単に識別できるようになった。たとえば、船頭、牡牛、象などの例において、古代の伝統的な教義に照らせば、過去における無尽

の輪廻の中で出現した所の仏法の啓示において、身念住の重点、その第一歩は、「戒清浄」の修習を出発点とするのである。

根本的な要諦とは、呼気と吸気を借りて、または四威儀（行・住・座・臥）、または正知、または四大界（地水火風）の思惟作意を借りて、または骸骨観を通してであろうとも、一人の修行者は、努力し精進しなければならない、という事である。心が清らかな時刻に、日に夜を継いで、専注に打ち込み、己の専注力を身体の上か、またはその姿勢において、安住させるようにする。もし、心の欲する所に従って、長い時間専注できるならば、完全に心霊（＝心）を支配することができ、そうなれば、精神病患者の状態から、抜け出すことができる。今、一人の修行者は、ちょうど舵を操れる船頭のようで、または訓練を終えた牡牛を持つ飼い主のようで、または訓練を終えた大象を擁する国王のようである。

心霊（＝心）を支配する（＝コントロールする）には、多くの異なった方法とレベルがある。仏法の中で、身念住を修習して成功させる事は、心霊の支配への第一歩である。禅定を通してではなく、純粋に vipassana の道を歩きたいと欲する修行者の、その独特の道は「乾観者（＋純観行者とも）」（Sukkha-vipassaka）と言う。彼らは、身念住を成功させた後、直接　vipassana の法門の修習に向かう。禅定の法門の中で、呼気と吸気の修習をする身念住を実践する修行者は、四禅中の色界に到達することができる；それは身念住の中の「色の作意（＝身体への意念を利用して行う修行）」の修習を意味しており、修行の対象は、身体の 32 の部分、たとえば、頭髪、体毛・・・などなどである・・・また、（＋このように修行行する）修行者は、八種類の正受（八定）に到達する事ができる。同様に、身念住の「不浄作意（＝不浄観）」を修習する時、その修行者は、初禅に到達することができる。

もし、修習の過程において、vipassana を成就したならば、修行者は、道と果に到達することができる。禅定と vipassana を修習していながら、現時点で、徹底的には証悟できていないとしても、もし、修行者が己の心霊（＝心）をコントロール（制御）して、なんであれ、（＋心の）専注力を（＋息または身体の）どこかに安住させることができるならば、仏陀の教えによると、この修行者は、不滅なる涅槃の法味を味わう事ができる。「身念住に沈潜する修行者は、涅槃の楽を享受することができる。」（《増支部》不滅品・第 20 経）

ここにおいて、涅槃とは、心霊の大いなる平静または徹底的な浄化を言う。原始の状態から見て、心霊の傾向は非常に不安定である。そしてその本質は焦燥的である。ちょうど、唐辛子の種の中に住んでいる虫は、唐辛子の辛さをしらないが如くに、愛欲を追

いかける衆生は、驕慢と憤怒の焦燥を知らない。故に、衆生は、心霊が不安な時の、焦りの熱を知らない；ただ、身念住を通して、心霊の不安が解消した時にのみ、（＋衆生は）不安な心霊の焦りの熱（＋の実体）を知るのである。

この種の焦燥の熱という現象を解消したいと願う人々は、この種の焦燥的現象が再発する事への恐怖を見出した。すでに初禅に到達したか、または生滅智に到達した修行者の例では、彼らは身念住を通してすでにこの種の焦燥的現象を解消しており、これ以上、何かの方策を講じる必要は無い。こうした事から、一人の修行者の成就のレベルが高いければ高いほど、身念住とは離れがたくなる。聖者は、己自身が涅槃を証するまでの間、四念処をば、心霊上の栄養物と見做している。一人の修行者が、専注力を身体のどこかの部位、たとえば、呼気または吸気において、一時間または二時間、留めることができる能力を有するならば、この修行者は、七日、または 15 日、または一か月、または二か月、三か月、四か月、五か月、六か月、一年または二年、または三年の内に、修行の成果を頂点まで持って行くことができる（＝証悟することができる）が、しかし、これは、この修行者の努力如何によるのである。

第三章　四正勤

「正勤」の定義とは：非常に努力して実践する事が出来る事で、また「勤め・奮闘する」（padhāna）ともいえる。諸「法」において、適切に、非常に努力して実践する事ができることを正勤（Sammā　padhāna）と言う。如何なる無理強いもなく、努力する事ができるのを「正勤」と呼ぶ。または、「熱心な精進」ともいえる。この種の努力は、心身について、強大な痛苦を齎すが、この種の努力は、四種類の特徴がある。その四種類とは；「私の皮膚、筋肉、骸骨が枯れ果てても、私の身体内の血と肉が枯れ果てても、己自身が人類の耐えられるレベルの、人類の努力と勇気と精進によって（＋ある種の）境地を証得する事ができる、その境地を証得するまで、私は精進努力を放棄することがない。」（《増支部》刑罰品）

上記の特徴は、以下のように纏める事ができる。
１、皮膚が枯れ果てても（＋精進する）。
２、筋肉が枯れ果てても。
３、骸骨（＝骨）が枯れ果てても。
４、身体内の血肉が枯れ果てても。

この種の努力は、一種の決断力を齎す：「もし、人間の努力によって、最終的な真理を証得することができるならば、いまだそれを証得していない前、私は決して放逸になる事がない」Soṇa 尊者（《律蔵》大品、第五、皮革犍度《分別論注疏》）及び護眼尊者（《法句経》は、この種の努力によって精進した模範・典型である。

一人の修行者が、仏陀が一生をかけて教えられた教えに従って努力し、己の一生をかけて精進したが、しかし、いまだ禅定、道、果を証得することができないならば、証得できないその原因は、この時代性にあるか、またはこの人間が「二因者」（二種類の原因、無貪、無瞋のみ存在している人）であるか、または過去世において、ハラミツの不足している人間であるか、という事ができる。

この世界において、ある種の人々は、仏陀の指示する精進のレベルとの間の、その距離が、相当に離れている。彼らは、あまつさえ「身至念」（身体の 32 種類の部分の観察）に効率よく安住して、盲目的に漂流する心霊（＝心）を治療するための修行をしたいとは、思わない。彼らは言う：彼らが「道」と「果」を証得することができないのは、時代の趨勢である、と。ある種の、彼らに似た状態の人々は言う：現段階の男性と女性は、彼らに「道」と「果」を証得せしめ得る、十分なハラミツに欠けている、と。また、似たような状況の人々は言う：現段階の男性と女性は「二因者」である、と。

これらの人々がこのように言うのは、彼らは、未了行者（注１）の段階の人々とはどういうものであるか、という事を理解していないからであり、そして、そうでありながら「正勤」を欠けているが為に、「道」と「果」を証得することができないのである。適切に「正勤」し、かつ「専心に実践する」（Pahitatta）ならば、一千人の修行者の内、300 人または 400 人または 500 人の修行者、または 30 人、40 人、50 人の修行者は、最高の成就を証悟することができる。ここで「専心に実践する」とは、「一生の終りまで努力し、怠けず、生命を犠牲にしてでも、努力する。決して放逸しない」という意味である。

（注１）Neyya の事。仏陀の短い開示、または詳細な開示を聞いても、道と果を証得することのできない者。彼は教義を詳細に閲読・研究し、その後に日に夜を継いで修行して、初めて道と果を証悟することができる。

Soṇa 尊者の努力の様子は、雨安居の三か月の中で、座ったまま横にならず、気を付けて眠らず、坐禅と、歩く瞑想をしたことである；護眼尊者の努力の様子も、ほぼ、上記と同じである。Phussadeva 尊者（《戒蘊品注疏》）もまた、同じような努力と奮闘により、25 年の時間をかけて「道」と「果」を証悟した。Mahāsiva＜《長部》（帝釈天問経）＞の例でも、30 年の努力をしたと書かれている。今の時代、特にこの種の「正勤」の努力、模範が要求される。

精進に勇敢な行者は、十分な経（＋への理解）と教えの基礎に欠けており、また経と教えの基礎がある行者は、往々にして、比丘の俗事に煩わされる弊害の中にある。たとえば、彼らは村に住んでいるとすると、法を論じたり、開示したり、著書を出版したりしなければならない。これらの修行者は、まったく 100％分断する事のない時間でもって「正勤」するのは難しいのである。

ある種の人々は言う：彼らのハラミツが熟した時、その時期がきたならば、彼らは世間の痛苦から簡単に抜け出して解脱することができる、と。そのような考えのために、彼らはこの種の努力が解脱への道かどうかを確定する事ができず、故に、諸々の努力を払おうとしない。彼らは、30 年間の努力によって生じる痛苦と、未来に対面する痛苦、（＋未来において）誰が苦しくて、誰が苦しくないか、を比較しようとはしない。この種の未来の痛苦は、解脱を証得する前であるならば、十万年間、地獄に堕ちる話でもある。彼らは明らかにこのようには考える事無く、30 年の努力による精進が引き起す痛苦は、地獄に三時間いるよりはるかに良い事を知らないのである。

彼らは以下のように言う：もし、30 年間努力をしても、なお解脱を証悟できないのであれば、どうせ今と同じ状態でしょう？と。しかし、もし、この修行者の機縁が熟したならば、解脱できるのである。己の精進努力の成果として、解脱を証得することができる；もし、いまだ機縁が熟さないとするならば、彼は未来において、解脱を証悟することができる。たとえ彼ら修行者が、今生の仏法の存在する期間において、解脱を得ることができなかったとしても、心霊（＝心）の再三再四の努力・精進によって生じる蓄積された業力（bhāvanā-āciṇṇa-kamma）は、非常に力のある業であって、彼をして三悪道を避けせしめるし、また善趣に再生した後、未来仏に会うことができる。あれら努力をしようとしない人々は、彼らの機縁が熟したとしても、30 年間の努力を払わないが為に、解脱の機縁を失い、何物をも得ることが出来ない上に、すべてを失ってしまう

のである。故に、一切の衆生に「慧眼」を得る様願うと共に、（＋己の）危機を察して頂きたいと思うのである。

「正勤」は以下の四種類である；
一、すでに生じた悪は滅する。
二、いまだ生起しない悪は、生起せしめない。
三、いまだ生起しない善は、生起せしめる。
四、すでに生起した善は、成長、発展させる。

已に生じた悪業といまだ生じない悪業

輪廻の中で漂流する衆生の中には、二種類の悪業がある。それは、已に生じた悪業と、未だ生じない悪業である。「已に生じた悪業」とは、過去または現在における悪業を言い、その中には、以前の輪廻においてなした悪行も含まれる。これらの悪業の中で、ある種の人々は、三悪道の中で転生しており、時間を無駄にしている。ある種の人々は、三悪道において、（＋よりよい）転生の機縁を願っている。三悪道に生まれることは、長い時間の受難、苦難となるのである。「身見」に落ち込んでいるそれぞれの衆生は、人類であっても、天人であっても、または梵天であっても、皆、過去において、無尽の罪債を蓄積している。というのも、このような悪業は、最低層の阿鼻地獄に入る、潜在的可能性を秘めているからである。同様に、彼らは、他の色々な業を蔵しており、その他の三悪道に、転生する可能性もある。

これらの、過去においてなした業等が、機縁が熟すと、（＋それに見合った場所へ）転生する事になるが、何度転生しても（＋その業は）随伴するのである・・・これらの業が、清らかに浄化されるまで。これがいわゆる「已に生じた」（uppanna）である。これら過去における「已に生じた悪業」とは、「身見」の中に植え付けられており、「身見」がある限り、いまだ業報が生じない内は、これらの悪業が消え去ることはない。
しかし、「無我」を直観する時、修行者は「身見」を取り除くことができる。この時より、一切の「已に生じた悪業」は、潜在能力を失い、かつ過去の悪業を貯蔵していた倉庫、蔵より、消失する。これより以降、修行者は、未来の輪廻の内、または夢の中においてさえも、三悪道に転生することはない。

「未生の悪業（未だ生じない悪業）」とは、未来の悪業を言う。今生における、次の刹那から始まって、今生であろうが、来世であろうが、その機縁の中に、一人の人間がなすであろう一切の悪行は、すべて「未生」（未だ生じない。anuppanna）と言う。一人の人間が今生で行う所の新しい悪業は、何世代も打ち続くのである。すべての、いわゆる「未生の悪業」は、みな「身見」が原因となっている。ひとたび「身見」が消えた

ならば、一切の、これからなすであろう、新しい「未生の悪業」は、刹那に消失し、消え失せ、何等の痕跡も残さない。ここにおいて、「消失」という意味は、まさに犯した悪業は（まさにこれから犯そうとする悪業は？）、未来において続いていく生命から、また、輪廻の中に存在する機縁から、即座に消え去るのである。

来世の輪廻の中において、これらの衆生は、たとえ夢の中でさえも、諸々の悪業、たとえば、殺生さえも犯さない。もし「身見」がいまだ存在する時、たとえ彼が宇宙の王で、宇宙全体をコントロールしているとしても、彼の前後には、なお地獄の火が迫っているのである。すなわち、「已に生じた悪業」と「未だ生じない悪業」に包囲されているのである。こうしたことから、彼は純粋に疑いもなく、地獄の熱火の中の命に過ぎない事が分かる。同様に、帝釈天、忉利天の天王、色界、無色界梵天の梵王などは、みな地獄の熱火の中の命である事が分かる。彼らは地獄と、三悪道に繋ぎ止められた命であり、輪廻の大きな渦の中で、浮沈して不安定であり、留まる事がないのである。

「已に生じた悪業」、「未生の悪業」を消し去る任務は、徹底的に「身見」から抜け出すことである。もし、「身見」を根絶する事が出来たならば、この二種類の悪業は、完全に消失する。「ソータパナ道果」に証入する聖人、たとえば、Visākhā と給孤独長者（Anāthapiṇḍka）は、すでに人類、天人、梵天において無数回転生しているが、しかし、彼らは、「身見」を取り除くその刹那から始まって、輪廻の大きな渦の中で漂流する事から解脱したのである。彼らは、第一段階の涅槃を証悟した衆生であり、そのレベルは「有余涅槃」（五蘊が依然として存在する涅槃）と言う。彼らは、いまだ輪廻する事はあるが、すでに凡夫ではなく、彼らは出世間の聖者である。ソータパナ果聖人とは、この二種類の悪業から解脱した者を言う。ここにおいて「已に生じた悪業」と「未生の悪業」に関する解説を終える。

已に生じた善業と未だ生じない善業

次に、私は「善業」を「已に生じた善業」と「未だ生じない善業」に分ける。先に、戒・定・慧の三学について述べて、その次に戒清浄、心清浄、見清浄、度疑清浄、道非道清浄、行道智見清浄、智見清浄について述べる。我々は、輪廻は、非常に怖いものだ、と言う。それは、「已に生じた」と「未だ生じない」所の悪行（duccaritas）は、身見を基礎とするからである。所謂、隠れ場所なく、天国はなく、依拠する所なくというのは、悪行と「身見」は同じものであるからである。「身見」が取り除かれると、新旧の悪行は、絶滅する。新旧の悪行が絶滅すれば、三悪道から輪廻から解脱することができ、後は、人類に生まれるか、天人または梵天などの比較的高い境地に生まれる。衆生は、三悪道と新旧の悪行の中から解脱する事を保証される為に、仏法を見つけたいという考

えを有した。今、仏法に出会えたが故に、「身見」という大きな悪を根ごと、取り除かねばならない。

衆生の「身見」は、三つのレベルに依拠している；
一、犯罪（Vītikkama）。
二、煩悩に絡まれる（Pariyuṭṭhāna）。
三、随眠（Anusaya）。

この三種類のレベルは「身見」の領域であり、粗い身見、中等の身見、微細な身見に分けることができる。ではここで、私は 10 種類の、悪行の身見の種の紹介をして、それが如何にして、身見になるのかを見てみようと思う。犯罪性のある粗雑、粗暴な身見とは、公開的な言動によって構成される悪業であり、＜煩悩のまとわりつき＞（中等レベル）とは、思想の中に生じる罪悪であり、随眠という微細な身見の罪悪は、無尽の輪廻を経ている内に、衆生の自我の中に埋蔵されているものである。しかし、この種、＜随眠＞の罪悪は、いまだ行為、言語または思想の中に顕現してはいない。我々は、マッチ箱の三種類の炎によって、この事を説明する事ができる。
一番目の炎は、マッチ箱全体に隠されている；
二番目は、マッチが摩擦されて後、燃え上がる炎の事である；
三番目はマッチの炎と何かが接触した為に、その他の物に延焼したものである。

この種の炎は、ゴミ箱、衣服、家屋、寺院、村落全体に燃え広がる炎である。その他の対象に燃え移った炎、それは粗雑、粗暴な「犯罪身見」だと言える。マッチ自体、マッチだけが燃えている場合の炎は、中等の「煩悩のまとわりつきによる身見」である。思想等の対象に接触して初めて、心霊（＝心）の中に顕現する。マッチ箱の中に隠されている炎は、微細な「随眠身見」であり、無尽の命の輪廻が原因で、有情の生命の中に埋蔵されている。マッチ箱の中に隠されている炎は、マッチの端が、マッチ箱の硝石と接触しないならば、燃え上がる事はない。

それは、たとえ火薬などの易燃性のものの傍にあっても、何等の傷害も齎さない。それと同じく「随眠身見」は、悪の思想、または悪の因と接触しないならば、人の身体の中に長く隠されていて、顕現する事はない。しかし、悪の思想、またはその他の悪因が、六根に入り込む事によって、「随眠身見」は、騒乱・心の乱れを起し、意根の中に顕現するか、または意志の作用を通して、「煩悩のまとわりつき」のレベルの中に顕現する。この時、もし善くて巧みな教えによって、これらの兆候を克服する事ができるならば、それらは「煩悩のまとわりつき」レベルから消失して、「随眠」のレベルに戻っていく。

それは潜在する本性のように、そこにおいて留まるのである。もし、騒乱・心の乱れを克服する事ができないのであれば、それらは引き続き、意志による作用という形をとって、顕現する。もし、それらが（「煩悩のまとわりつき」のレベルにおいて）更に（＋心が）乱されるならば、悪語または悪行の形式で顕現する。

この世界において、もし、一人の修行者が「犯罪」と「煩悩のまとわりつき」のレベルにおいて、自我をコントロール（制御）する事ができ、かつ、もし彼の行為、言語と思想について、己自身によってコントロールできるが故に、清浄であり、汚染を受けないならば、この人は、善良であり、敬虔であり、または道徳のある人間であると言える。しかし、この種の人間は、「随眠」のレベルまでは察知していない。もし、「随眠」のレベルにおいて、未だ、根を取り除いていないのであれば、「犯罪」と「煩悩のまとわりつき」のレベルにおいて、完全なコントロール（制御）ができていたとしても、この種のコントロールは、暫定的なものに過ぎないのである。もし、この人が、強くて力のある（＋心境でもって）、良好な模範として振る舞うならば、この種のコントロールは、一生続くことができる。

しかし、来世において、今生と同じであるかどうかを、決めることはできない。というのも、「犯罪」と「煩悩のまとわりつき」という、この二種類のレベルは、再び、浮上してくる可能性があるからである。貪・瞋・痴もまた、それぞれ、三種類のレベルがある。身見の、この三種類のレベルを徹底的に打ち壊す為には、人々は、必ず戒・定・慧の三学において、奮闘努力しなければならない。彼らは「七清浄」を修習しなければならないのである。

まさに、一般の人々が理解しているように、戒・律とは、「活命戒」（Ājīvaṭṭhamaka-sīla）の事である。「布薩戒」（八関斎戒）及び 10 戒は、すなわち、常戒の、精緻なものを言う。これらの戒・律を観照できる事はよい事であるが、もし、観照できないとしても、大きな問題はない。身に黄衣の袈裟を纏っている修行者は、「活命戒」と「10 戒」が、いわゆる（＋守るべき）「戒・律」となる。「八関斎戒」は、10 戒の中に含まれるものである。

比丘について言えば、「四遍浄戒」（すなわち、比丘戒。波羅提木叉、活命遍浄戒、根律儀戒、資具依止戒）が、いわゆる（＋守るべき）戒律となる。全身全霊で、身体（たとえば、呼吸）と骸骨（＝白骨）において安住する時、遍作定、近行定、安止定（または八定と言う）が生起するが、それが禅定を構成するものとなる。四種類の世間的な「清浄」（見清浄、度疑清浄、道非道清浄、行道智見清浄）とは、見清浄から始まって、出世間的な智見清浄と結合して、智慧を構成する。

身見の三種類のレベルの中で、戒・律は、「犯罪」のレベル（＋の身見）を、打ち壊す事ができる。これは、もし、一人の修行者が、戒清浄を擁しているならば、言動上の身見は、生起しない事を意味する。禅定は、「煩悩のまとわりつき」のレベルの身見を打ち砕くことができる。これは、もし修行者が「作意の修習」（すなわち、心を一処に制する事）に安住することができるならば、思想上の「身見」は生じない事を意味する。智慧は、「随眠」レベルの「身見」を、根ごと取り除くことができるが、これはすなわち、もし、直観（＝vipassana）が証得されたならば、身体全体は「名」と「色」の結合にすぎず、ただ、無常・苦・無我の集合にすぎず、人だとか、有情だとか、常だとか、楽だとかの方式で顕現する潜在的な身見は、（＋この直観によって、修行者の心の内に）ことごとく滅し去ることになる。ただし、（＋修行者の内に）この種の随眠身見が存在している限り、戒律によって打ち壊された所の「犯罪」レベル、及び禅定によって打ち壊された所の「煩悩のまとわりつき」レベルの、（＋修行によって、身見が打ち壊された事で得られる成果は）暫定的な現象、成果に過ぎないのだと言える。

「已に生じた」と「未生（未だ生じない）」を区別する二種類の方法とは；
一、今生を起点とする区別。
二、過去の輪廻を起点とする区別。

今、私は、今生を起点とする区別の方法を述べる。今生において、いまだ戒・律を修習した事のない人は、「已に生じた戒・律」を具有していない；今生またはある段階の時期において、戒・律を修習するならば、この種の戒律は「已に生じた」と言える。同様に、禅定と智慧の例では、過去にすでに証得したものを「已に生じた」と言い、過去に証得した事がないものを「未だ生じない」と言う。過去の輪廻を起点とした場合の区別の方法は二種類の戒・律があり、それは「世間的戒律」と「出世間的戒律」である。「世間的戒律」は「已に生じた」ものである。というのも、一人の衆生が過去の輪廻のある時期に、「世間的戒律」を修習した事がない、などという事がないからである。しかし、凡夫の立場で言えば、「出世間的戒律」は「未生」の戒律である。禅定もまた二種類ある。それは「世間的禅定」と「出世間的禅定」である。

「世間的禅定」はすでに過去の輪廻の内に証得したとしたならば、それは「已に生じた」と言う。そして、凡夫の立場で言えば、「出世間的禅定」は、「未生」である。智慧にもニ種類ある。それは「世間的智慧」と「出世間的智慧」である。「見清浄」、「度疑清浄」、「道非道清浄」、「行道智見清浄」は、「世間的智慧」である。これら「世間的智慧」は、過去世の中で、仏法に出会った事のある人にとっては、「已に生じた」であり、未だ、仏法に出会った事のない人にとっては、「未生」である。「智見清浄」は、「出世間的智慧」である。凡夫の立場から言えば、「出世間的智慧」は「未生」である。というのも、過去の輪廻の中で、いまだ「出世間的智慧」を証得していないからである。

次に、私は、四種類の「精進」に関する要諦を述べる。ただ仏法に出会った者、すなわち、修行者だけに、徹底的に己自身の新旧の「已に生じた悪業」の点検をする機縁が生じる。仏法に出会ってのみ、一人の修行者の中で、一系列の存在が顕現する所の「新しい悪業」を止める縁起が生起する可能性がある。輪廻は無限であり、もし、一人の修行者が、仏法に出会う事がないのであれば、この二種類の悪業を点検する機縁がない。というのも、己自身で、この二種類の悪業を点検する作業は、「随眠」レベルの「身見」を根こそぎ取り除く事と一致するからである。また、随眠レベルの身見を根こそぎ取り除く事は、一種「無我の禅修」に相当する。一人の修行者が、仏法に出会う時に初めて、この種「無我の禅修」（Anatta-bhāvanā）が生起する。独覚仏として授記された人が、仏法と出会う時、先に「無我の禅修」の種を取得する必要がある。ひとたび、仏法が世界において、消失したならば、「無我」の（＋教えの）声は聞こえなくなる。いわゆる「無我」の教えの声とは、色、名、蘊、処、界と縁起の声である。アビダンマ論全体は、「無我」の声に満ち満ちているが、論蔵の註疏もまた、そのようである。「無我の禅修」は、先に戒清浄が具足していなければならない。

その後に「身至念」（32 身体部分）に安住し、虚妄・妄想によって不安になる己の心霊を、禅定と直観（vipassana）を通して、浄化し、コントロール（制御）しなければならない。ただこのような努力を通してのみ、「随眠」レベルの「身見」を根ごと取り除く事が出来、そのことによって初めて、すべての「已に生じた身見」と「未生の身見」と悪行が、ことごとく滅し去られるのである。未だ出現していない善業を出現させ、すでに出現した善業を発展、成長させる精進・努力とは、「身至念」に安住した後、「無我の禅修」を円満具足する努力を言うのである。

已に生じた戒・律と未生の戒・律

「未生の戒・律」とは、過去の無数の輪廻の中において、凡夫の中に一度も出現した事のない戒・律であり、それは「正語」「正業」「正命」という、この三種類の戒と律

であるが、それはいわゆる「ソータパナ道」の中に含まれるものであって、かつ彼らの目標としては、涅槃が対象となるものである。この種の戒・律は、行為、言語によって露出する所の悪行と、誤まった生活の仕方を打ち壊すことができる。（＋悪行を）打ち壊す事が始まったその刹那に、行為と言語、生活おける維持の仕方によって露出する所の悪行は、二度と出現する事はない；たとえ以後の（＋輪廻の）世々代々の中においても、出現する事がない。

一人の修行者が、「無我の禅修」の修習に成功する時、はじめて出世間の戒・律を証得することができる。身を仏法の時代において、衆生は、この種の「未生の戒・律」を成就するよう精進・努力しなければならない。その意味は、「戒・律清浄」を打つ建てる刹那から始まって（「身至念」の修行から始める）、「無我の禅修」を円満具足するまで、衆生は、必ずや、（全くの怠けなく）37 道品を修習する努力をしなければならない、という事である。過去の無数の輪廻の中でよく出てくる所の「已に生じた戒・律」は、「世間的戒・律」または「欲界戒・律」と言う。我々が、一人の修行者が、戒・律に関して安定した状態に到達するまで努力するべきだと言う時、我々は「世間的戒・律」には二種類のレベルがある事を知っていなければならない。それはすなわち、「定法」（niyāma）と「不定法」（aniyāma）である。聖者の境地は、「定法」のレベルにあり、凡夫の境地は「不定法」のレベルにある。

「ソータパナ道」にある聖者は、「欲界世間戒・律」が「定法」のレベルに到達する。「ソータパナ道」の聖者は、たとえ夢の中でさえも、「活命戒」を犯す事はなく、輪廻を経て、最後には完全な涅槃を証得する。しかし、一般の凡夫においては、「欲界世間戒・律」は、いまだ「不定法」のレベルにある。これら凡夫は、過去の無数の機縁において、すでに徳行、倫理を有する修行者であったが、しかし、彼らは無数の三悪道において、受難した経験がある；そして、その他の機縁においては、彼らは、有徳の仙人であったり、比丘であったりした事がある。しかしながら、過去生の中で、彼らはいまだ三悪道に堕ちこむ危険性から脱出していない。

現在、身を三悪道に置く衆生は、計算しがたい程（＋多いの）である；三悪道に堕ちそうな人類、天人、梵天もまた計算しがたい程、多いのである。故に、「欲界世間戒・律」を具足する衆生は、いまだ「不定法」の中にあり、言い換えれば、暫定的にそれを擁しているのだと言える。まさに仏法の時代において、彼らは「不定法」から「定法」へ、転換するべきである。彼らは「身至念」に安住し、それがひとたび成就したならば、「無我の禅修」を成就するまで、37 道品を修習するべきである。善業に関する二種類の戒・律の説明を、ここで終える。

已に生じた禅定と未生の禅定

禅定にも二種類のレベルがある。すなわち、「定法」と「不定法」の禅定である；同様に、智慧にも二種類のレベルがあり、それはすなわち、「定法」の智慧と、「不定法」の智慧である。一人の修行者が、「アナーガミ」の境地に到達する時、「安止定」ははじめて、「定法」の禅定になる。そして、この種の「安止定」は、八種類または九種類の定（八定の上に滅尽定を加えたもの）である。唯一、阿羅漢の境地を証得した人間だけが証得した所の、如々に不動の智慧だけが「定法」の智慧であると言える。

今、私は「ソータパナ道」聖者の契入する、禅定と智慧について、説明する。まさに《有明大経》（《中部》第 43 経）にあるように・・・「ソータパナ道の正精進、正念、正定は、涅槃を目標としており、それが故に、それは＜出世間の禅定＞であると言われる。」この三種類の禅定（遍作定、近行定、安止定）は、「捨断（samucceda-pahāna）の力による。それは確固として、貪婪、瞋恚の内的邪悪を根絶するが、この種の邪悪は、邪精進、邪念、邪定が源になっている。捨断の（＋実践が開始された、その）刹那から始まって、これ以降、何度輪廻しても、この種の貪婪、瞋恚は、二度と、生起しない。（＋修行者の心に）「無我の禅修」が顕現する時、この種の禅定は、唯一仏教の中で成就することができる。故に、我々が仏法に出会っている今、衆生は、仏法の縁が尽きる前に「未生の禅定」を証得するよう努力しなければならず、決して怠けてはならない。この事は、「身至念」から始めて、37 道品を修習しなければならない、という意味であり、それは「無我の禅修」が成功裏に具足、証得されるまで（＋続けられなければならないのである）。

過去の無数の輪廻における「已に生じた禅定」は、「欲界禅定」「色界禅定」及び「無色界禅定」が含まれる。我々が、努力と精進でもって、「定法」の「已に生じた禅定」を形成しようと言う時、「世間的禅定」にはニ種類のレベルがあり、それは「定法」と「不定法」である事を、知っておかねばならない。聖者が擁する世間的正精進、正念、正定は、「定法」の上に打ち建てられている。これ以降の来世において、最後の涅槃を証入するまで、これら聖者は、たとえ夢の中においてさえも、貪婪、瞋恚等の邪悪な行為は、決して生起しないのである。凡夫が擁する所の世間的禅定は、「不定法」のレベルにある。無数の過去の輪廻の中で、これらの人々は、入定の凡夫であり、入定の仙人であり、入定の比丘であり、多くの生において、飛天入地などなどの禅定と神通力があった者である。

ひとつづつの世界系統の生命の周期は、四つの「劫」（kappas）に分けることができる。一つの劫は、非常に長い。これらの劫の中で、これらの凡夫は、梵天の梵王であったりした事がある。各種の世界の、それぞれの系統の中にも、三悪道は出現する。同

じ似たような梵天において、これらの三悪道は充満しており、他の衆生はいない。これらの衆生は、かつては梵天王、餓鬼、地獄の衆生、畜生及び阿修羅であった事がある。無尽の長い輪廻から見ると、各種の世界の系統の生命の周期は；一瞬の瞬きくらいなものなのである。

故に、我々は、我々の身が、いまだ仏法の機縁の中にある内に、「不定法」である世間的正精進、正念と正法（過去の無尽の機縁において獲得したもの）をば、「定法」の世間的精進、正念、正定に変え得る様に、精進・努力しなければならない。ひとたび、「身至念」に安住した後、我々は「37 道品」を「無我の禅修」が円満成就されるまで、修習しなければならないのである。善業に関する二種類の禅定の説明は、これで完了する。

已に生じた智慧と未生の智慧

《有明大経》に以下のような事が書かれてある：

「ソータパナ道における正見と正思惟は、涅槃を目標としており、故にこれを智慧と言う。」

この種の智慧は、随眠レベルの身見を打ち壊すことができるし、また、捨断の力が強く、一切の邪見、邪思惟の遺跡を完全に取り除き、堅固な心で、悪行、邪命を断じ除く。邪業の古い蔵、倉庫もまた、完全に消え去り、次には、三悪道の輪廻の中から解脱することができる。この時より、邪見悪行の罪悪は、未来の生において、二度と生起することはない。

唯一、仏法の中において、「無我の禅修」が生起する時においてのみ、智慧は、生起する。故に、すでに仏法に出会えた衆生は、仏法がまだ存在する時期に、この種の「未生の智慧」を証得する為の努力をしなければならない。この事は、「身至念」から始めて、「無我の禅修」が円満具足するまで、37 道品を修習しなければならない事を意味する。聖者の世間的正見、正思惟は、「定法」のレベルの上に打ち建てられている。彼らが、それに安立する刹那から始まって、一系列の生まれによる転生を通して、涅槃を証入するまで、これら聖者は「業自性」の正見智、経教智、実践智及び四聖諦を、擁している。

しかし、凡夫の擁する世間的智慧は、「不定法」のレベルの上に打ち建てられている。凡夫は、無尽の輪廻の中で漂っており、ある時には「法」の中で学習し、ある時には、修習の内から名声を獲得し、ある時には転生して大長老になり、あるときには大物理学者になり、その他の時期には、かたつむり、回虫、蛭、蚤、昆虫、蛆などの動物・生物になって、ただひたすら生存そのものだけを、願うのである。故に、衆生は、縁があっ

て仏法に出会ったならば、「不定法」（暫定的か、または刹那的に擁する法）の智慧を、「定法」の智慧に転換するよう、精進・努力しなければならない。この事は、「身至念」から始めて、「無我の禅修」が円満具足するまで、37 道品を修習しなければならない事を意味する。善業に関する二種類の智慧についての説明は、これで完了する。

長い間、無尽の輪廻を通して、「身見」はすでに我々の人格の中に、塑造として作られている。それは打ち壊される事無く、その為に（我々の心の中は）貪欲、瞋恚、痴などの煩悩が、引き続き強烈であり、雑多で、力を持っているのである。それらは、我々の心の中に住み着いた原住民（ママ。差別用語ではない）であると言える。この種の状況の下で、煩悩の敵となる戒・律、禅定と智慧は、偶然訪れる客のようである。彼らの訪問は、外部の敵が、Āḷvaka（鬼の住む食人国。《相応部》（夜叉相応））に侵入したようなものであって、これらの食人鬼は、非常な力を持っている。ここに侵入した外来の敵は、往々にして、これら食人鬼に食べ物として食われてしまい、住まいも壊されてしまう。

ある時、500 人の仙人が、シュミ山からこの食人国に来たが、食人鬼は、500 人の仙人の足を掴んで、すべて恒河（＝ガンジス河）に投げ込んでしまい、500 人の仙人は、跡形もなく消失してしまった。こうしたことから、凡夫、仙人と比丘たちは、幸い今生で仏法に出会えたのであるから、また、来世は罪悪から離れたいと願っているのであるから、また、己自身の身の上に、たとえば「戒・律清浄」の法を打ち立てたいと願っているのであるから、適切に、正しく勤めて四念処を修習し、「随眠」レベルの身見を、打ち壊さなければならないのである。

もし、彼らが、愚・痴（＝愚かと無知）の中から解脱したいと願いながらも、しかし、この種の愚・痴とは、智慧の欠けた暗黒の中に落ちこむ事を意味し、かつ、（＋彼らから）仏法僧の神聖なる特徴の記憶と、仏法を弘める貴重な情操を、抜き去るのであるならば、来世において、（＋彼らの心の中に）何等の（＋仏法の修習における）痕跡も残すことがない；彼らが、巨大な「邪法」から解脱したいと願っているのではあったとしても、これらの「邪法」は、かつて、無尽の輪廻の中で、彼らをして、一切の偽の仏法に近づきせしめ、敬礼せしめていたのである。

故に、凡夫の立場から言えば、彼らは真実の仏法を知らず、真実の法を知らず、真実の僧（＝サンガ）を知らない、ということである。もし、彼らが今生、今世から始めて、「信」を証得し、「慧」を証得したいと思うなら、このことを借りて、真実の仏、真実の法、真実の僧に、心より礼拝したいと思う心を、生起せしめることができる。もし、彼らが、これら一切を「定法」としたいと思うならば、適切な正しい態度で、四念処を

修習し、「随眠」レベルの身見を、打ち壊さなければならない。こうした事から、適切な正しい態度での修習とは、「皮膚が枯れても、骸骨が枯れてもなど等」の堅固とした決意によって、完成されるものである事を、意味するのである。「正勤」に関する説明は、これで完了する。

第四章　四神足

今、私は、「神足」（iddipādas＜ママ＞）について、簡単に説明する。この文字の解釈は「円満な境地を証得する（ijjhanaṃ　iddhi）」である。（「iddhi」も「iddhipadas＜ママ＞」も、超自然的な神力の事を言うのではなくて、法において、修持・修習の成就の基礎となるものを指す。本文では「iddhi」を「如意」と訳し、「iddhipādas」を「神足」と訳して、両者の区別とした。）

仏陀の教法の中で、合計五種類の「如意」（iddhi）があるが、それは・・・、
諸々の、たとえば、「名」「色」などの特別な知識を必要とする事柄に対して、円満な境地に到達する事。
諸々の、たとえば、「苦聖諦」等の全面的に理解する必要のある事柄に対して円満な境地に到達する事。
諸々の、たとえば、「集聖諦」等の、断絶しなければならない事柄に対して、すでに断絶に証入した所の、円満な境地。
諸々の、たとえば、「滅聖諦」等の、実現する必要のある事柄に対して、すでに証得した所の円満な境地。
諸々の、たとえば、「道聖諦」等の、発展せしめるべき、または育成するべき事柄に対して、已に発展を成し遂げた円満なる境地。

仏陀の教法の中には、五種類の根本的な「如意」がある。
①「神通如意」（abhiññāsiddhi）：「第一義諦」の数目と意義を円満に分析し、認識する事。一人の修行者が、もし、「第一義諦」を認識・理解していないのであれば、仏

法の範囲を逸脱してしまう。アビダンマ論（アビダンマは、一切の根本的理論の真髄である）を全般的に理解する事、それがすなわち、「神通如意」である。

②「遍知如意」（pariññāsiddhi）：相（lakkhana）、作用（rasa 味）、現状（paccupaṭṭhāna 現行）、近因（padaṭṭhāna 足処）を通して、またはそれらが具備する所の「無常」「苦」「無我」の三法印を通して、「苦聖諦」を円満に理解する事。

③「捨断如意」（Pahānāsiddhi）：煩悩を円満に打ち砕く「集聖諦」（＋の事）。本書の主要な重点は、最低レベルのソータパナ聖者（Sotāpanna）においており、高位の聖者（＋には触れない）。「身見」を円満に打ち壊したならば、それがすなわち、「捨断如意」である。「疑」を取り除く仕事は、「身見」を打ち砕く修行・仕事の中に含まれる。

④「現証如意」（Sacchikiriyāsiddhi）：心・身の二つの方面において、「滅聖諦」を円満に実現する事。この種の仕事には、煩悩の制圧と、破壊が含まれる。

⑤「修習如意」（Bhāvanāsiddhi）：苦の滅、出世間である所の「道聖諦」を証得するまで、ひたすら戒・定・慧の三学を開発する。

もし、「清浄道」の順序でもって「如意」を分類するならば、「戒清浄」を円満成就するという内の、その中に含まれる「四遍浄戒」（catupārisuddhi）は、「四如意」を具足している事になる。「心清浄」の内においては、同時に「八正定」「遍作禅定」（Parikamma samādhi）、「近行禅定」（upacāra samādhi）を円満成就するが、それはすなわち、「八如意」を具足した事になる。五種類の世間的神通を円満に成就したならば、たとえば、神変などの能力であるが、それは「五如意」を具足した事になる。「慧清浄」では、「見清浄」を円満成就するならば、それはすなわち、「一種の如意」を具足した事になる。このような方式に従って、更に高度なレベルの「如意」を理解することができる。仏法における（＋「如意」に関する）陳述は、これにおいて一段落する。

「神足」（iddhipāda）という、この文字の意味は：「円満に証得する為の基礎を、神足と言う」である。「神足」は合計、四種類あるが、それは：欲神足、勤神足、心神足、観神足である。「欲」（chanda）は、証得したい、達成したい、円満（＋に成就したい）、完成させたい、という欲望の事である。ここで言う所の欲望とは、一種極端な、過度の欲望を言い、なにかが、または誰かが阻止できるようなものではない所の、そういう種類の欲望である。この種の欲望は、以下の様な考えを引き起す。すなわち「も

し、私が、今生において、この種の円満なる状態を証得しないのであれば、私は安心したり、満足したりしない。もし、証入することが出来ないのであれば、死んだ方がましである。」と。

迦葉仏の時代（ゴータマ仏の前の仏）、バラナシの法泉王（Dhammasonda）（Rasavāhimī、Jambūdipuppaṭṭi-kathā）は、まさにその種の欲望を持っていた。法泉王は己自身に向かって言う：
「もし、私に機縁がなくて、迦葉仏の教えを聞くことができないのであれば、バラナシの国王となったとて、何の意味があるだろうか？」
こうして、彼は国王の地位を捨てて、迦葉仏の教えを復唱できる修行者を探しだして（+満足した）。たとえ彼が、ただの短い偈を一句言えるだけの、修行者であっても。
ちょうど、ビンビサーラ王（《小部》（戸外経））や、ヴィサーカ居士、及びアナタビンディカ長老（《法句経注疏》第一偈頌、参照）の例のように、もし、この種の欲望が満足されて、初めて（＋その人は）安心、安息する。

ここにおいて、微妙に暗示されている事は、この種の欲望は、証得することができるものである。ただ、いまだ、円満に具足していない時、その心霊（＝心）は迷い、惑う事があり、かつ、もし、この種の欲望を円満に具足できないならば、死んだほうがましだ、という考えが浮かぶ事がある。Temiya 王（《本生経》（唖聾本生譚））、護象王（《本生経》（護象本生譚））及び仏陀在世の頃の多くの国王、賢人、富豪たちもまた、この種の欲望を持ち、彼らは王宮を捨て、従者を捨て、その他の贅沢品を捨てて、仏陀のサンガに入って、生活した。

「勤」（viriya）は、四種類の特徴を持つ正勤・精進を言う。「勤」を有する修行者は、精進・努力しさえすれば、目標に到達できるのだという思想によって鼓舞される。他人が彼に、（＋修行において）極めて大きな困難に出会うであろうと忠告しても、志を失う事がない。そして、彼は本当に、極めて大きな困難に出会っても、心が怯える事がない。たとえ、人々が（＋修行の成就には）どれほどの長い歳月、時間が必要であるかを説いても、彼は志を曲げないし、彼はすでに一定期間の長い時間を修行に費やしたとしても、彼の心は、怯えて、撤退する事がない。「勤」が弱い人は、ひとたび極めて大きな努力を要求される時、修行を止めてしまう。人々が彼らに、友人や外塵とは遠く離れなければならないと言う時、彼らは怯え、後退する。

止観（＋の瞑想が）長い時間をかける必要があると知った時、彼らは怯え、後退する。人々が彼らに、節食して、睡眠を減らすように言うと、彼らは怯え、後退するし、止観（＋の瞑想）には長期の時間が必要である事を知ると、怯え、後退する。彼らは「白い

犬が草むらに入るのを怖がる」のと同じである。白い犬は、30cm 程の草むらにも入るのを恐れるが、彼らはそこに豹や虎や象が生息していると、思っているのである。

「心」（Citta）は、修行者が、仏法に接触したり、仏法を聞いたりした時、「如意」に固着（＝執着）する事を言う。この種の固着は、極めて強烈な情熱を言う。一人の人間が、甘美で豪華な世界において、権勢と幸運に恵まれた生活をしていたとしても、その人が修行者であるならば、これらの事柄に誘惑される事なく、経典の研究をしたりして、彼の心霊は、常に「如意」の中にあるのである。一人の修行者は、唯一、全身全霊を「如意」に関する事柄に貫通させる時においてのみ、満足と安らぎを得ることができる。それはちょうど、錬金術師が、根本物質を金銀に転化しようとして、全神経をその活動に投入するようなものであって、このような錬金術師は、他の事柄に関心を持たず、ただ、錬金という活動にのみ集中する。彼は寝食を忘れ、歩くときも自己を忘れる。「心」とは、この種の巨大な専心の活動であり、またはこの種の性質を持つ、固着的活動なのである。

「観」（Vīmaṁsa）とは、明確にはっきりと地獄、輪廻における巨大な痛苦を覚知する事の出来る知識または智慧を指す。この種の知識は、明確にはっきりと「如意」の利益を覚知することが出来、深くて沈潜する所の、艱難なる「法」に、また「法」の性質において、安住することができる。この種の知識を具足する人は、「如意」を追い求める以外に、世間的な如何なる追求にも、楽趣を見出さない。ただ奥深い「如意」を追い求める時にのみ、彼は満足を覚える。「法」が深ければ深いほど、それを証得したいと思う欲望は益々強烈になり、巨大になる。修行者は、四種類の「神足」の内の一種類を具足しさえすれば、その一生において、「身念住」における安住と、仏法におけるさらなる高度なレベルの、たとえば、「心清浄」、「見清浄」等において、不断に努力・精進するが、（＋修行において）怠けたりもしないし、無気力になる事もない。ただ、これまで一度も、なんらの「神足」をも具足した事がなく、生命の深浅や、法の深浅を区別する能力がない人は、無気力になり易く、如何なる努力も、継続しがたいのである。

修行者は、四種類の「神足」の内の一つでも具備していれば、今生または来世において、天人となることができ、また、己自身の「ハラミツ」に従って「出世間的如意」に到達することができる。もし修行者が、二種類、三種類、または四種類の「神足」を具足するならば、利益は、更に大きくなることは言うまでもない。如何なる「神足」をも具足しない人、彼らは（＋まずは）一種類の「神足」を追い求めるよう、チャレンジしてみるべきである。彼らには、高度で超越した仏教の利益を追い求めたいという希望がない為、たとえば「四念住」（＋の修行）において、無気力になり、怠けてしまうのである。彼らは、この種の無気力感は、「悪趣」への高速道路なのだ、という認識を持た

ねばならない。故に、彼らは、「欲神足」を喚起する事のできる各種の偈頌、または開示等の研究、思考、沈思などを実践しなければならない。彼らは、「欲神足」を喚起する事のできる導師に親しみ、この導師に依止するべきである。

仏陀は以下のように言う：
精進・努力して「欲神足」を開発すべし。
精進・努力して「勤神足」を開発すべし。
精進・努力して「心神足」を開発すべし。
精進・努力して「観神足」を開発すべし。
（《相応部》（神足相応））

「如意」から遠く離れている修行者は、「神足」を証得したいとも思わない。「欲神足」がない人は、「欲神足」を追求する必要性も感じない。その結果、軟弱で、無気力で、挫折しやすい人になる。「勤神足」「心神足」「観神足」においてもまた、同様である。心霊（＝心）を「身至念」の上に安住せしめれば、「欲神足」を打ち立てたと同じである。輪廻の苦しみを黙想する「厭離心」（Saṁvega）の不思議な物語（＋を参考に）、己に対して苦行やその他の「法」を実践する事は、「勤神足」に相当する。己自身を奥深い「法」、たとえば「四大」（《相応部》（神足相応））に投入するならば、それは「観神足」になるのである。

もし、どれか一つの「神足」が打ち建てられたならば、それぞれの「如意」は、己自身の「ハラミツ」によって、証得できるのは、確実である。故に、注疏の中で述べられているように、何等の「神足」をも具備しない人は、caṇḍāla（下賤な者の意）の子のようであり、何等かの「神足」を一つでも具備する人は、国王の子のようである。caṇḍāla の子は、国王になる基礎に欠けているため、決して国王にはなれない。しかしながら、国王の子であるならば、国王になるという目標が目前にあるため、常に、国王になるのだという目標に向かって前進する。このように、現代の智者は、四種類の「神足」を獲得する為のチャレンジをするべきであり、このようにして初めて「身見」という巨大な根を打ち壊すことができ、かつ、仏陀の教法の中で、己自身の「ハラミツ」に従って、更に高いレベルの、果位の利益を証得することができる。

第五章　五根

「根」（Indriya）は、支配者によって掌握される行為を言う。そうであるが故に、「根」と呼ばれる。いわゆる「支配者によって掌握される行為」とは、支配者が掌握している所はどこであっても、違犯する者がいない、という意味である。故に、一人の修行者が、己自身の心霊（＝心）を掌握して、コントロール（制御）する力は、根本的な要素となるのである。
「根」は、合計五種類ある。それぞれ：信根、精進根、念根、定根、慧根である。

「信根」は「信仰」を意味する。「信仰」には二種類ある。
それぞれ：自然信（pakati　saddhā　）。修習信（bhāvanā　saddhā）である。
「信仰」は一般の人々を、布施、戒律（＋の守護）、初級的な禅定、色々な実践に導くことができるが、これを「自然信」と言う。この種の「信仰」は、禅定の修習程には、一般の人々の心に安定を齎すことはできない。「信仰」に欠ける一般の人々の心は、決して善業に転向する事はなく、反対に邪行の中で喜びを感じるのである。
（原文一部意味不明につき、略）

「戒律清浄」の実践・修行と、経典の研究に関しても、同様である。止観の「業処」を修習する事において、「自然信」は、心霊（＝心）をコントロール（制御）する事はできない。というのも、心霊は、「信仰」のコントロール（制御）に対して、容易に反撃に出て、（＋心を）他へ向かわせるが故に。「業処」の修習には、「自然信」はあまり役に立たないのである。「修習信」は、種が発育する温床である。言い換えれば、修習の内に、たとえば、呼気・吸気という「業処」において、課題を修習するならば、巨大なエネルギーを得ることができる。

「37 道品」の中では、「修習信」だけを、「信根」と呼ぶ。「業処」の修習において、「修習信」とは心霊の揺れ動いて不安定なエネルギーが消失して、清明な、安定した心が生起する事を意味している。心の専注力が清明になった時、そしてまた、迷わず、惑わない時、その時初めて（＋心は）これらの対象に固着することができる。「身念住」の修習、たとえば、呼気・吸気の「出入息念」は、「修習信」（＋を持つための）前提的温床である。もし、心が「身念住」の固着するならば、たとえば、呼気・吸気であるが、それは「修習信」を得たのだと言える。しかしながら、もし「禅定」と「直観（＝vipassana）」の範囲の内に修行を継続して、「身見」の三種類のレベルを打ち壊す能力を得たいと思い、適切に「禅定」と「直観」を修習したいと思うのであれば、彼らは、法に通達している導師に依止しなければならない。

「精進根」とは「精進」の事で、合計二種類ある。
１、自然精進
２、修習精進

また、別の分類方法では、
１、身精進
２、心精進。

「自然精進」は容易に理解することができる。たとえば、世間的な事柄に対して、特異な「自然精進」を擁するならば、容易に「修習精進」を得ることができる。常乞食支、常坐不臥支、樹下坐支、露地坐支、塚間住支等の頭陀苦行とは、すなわち、「身精進の修習」に当たる。もし「身精進の修習」に安住する事ができたとして、たとえば、短時間の睡眠、かつ目覚めた心を持ち、気力に溢れていても、それは「心精進」とは言わない。たとえば、心において熱情的に以下のように作意する：呼気・吸気の「業処」の対象において、安定的な専注に到達できない、また、修習の期間、退屈で長い、心霊と覚知の上で、なんらの確信も得られない（＋と反省したとしても）。

如何なる修行においても、修行者本人が実践し、かつ早急に掌握して初めて、適切な修行であると言える。もし、修行が修行者を掌握する（＝修行者の負担になる）ならば、それは適切ではない。いわゆる「修行が修行者を掌握する」とは、修行の過程において、エネルギーが枯渇し、具体的な成果もなく、何日も無駄にしたあげく、身体に不快な現象が起き、最後には懈怠になる事をいう。懈怠が出現すると、修行は進まず、修行が進まないと、一層懈怠に嵌る。そして以下のように思う：「修行の形式を替えよう。」こうして、常に、修行の形式を替えるようになる。これを、修行が修行者を掌握する状態、と言うのである。

「業処」の修行において、「身精進」と「心精進」を具備する修行者だけが、迅速なる精進を得ることができる。「身念住」に安住するその刹那から始まって、日ごとに精進を開発するならば、それは「修習精進」であり、この種の精進は、「37 道品」では、「精進根」と呼ばれる。それは「業処」の修行において、懈怠の解消であり、熱情とエネルギーの出現を意味する。心が対象に力強く安住する時、修行者に快感が生じる。故に、「修習精進」に安立する事、及び逐一的に発展する事は、「信根」と同じなのである。

「37 道品」の中において「念根」は、諸々の、たとえば、呼気・吸気の身体部分において、「出世間的正念道」を証悟するまで、「身念住」に安住し、「修習念」を開発する事を意味する。「定根」と「慧根」は、界定に相当する（原文不明瞭につき、意訳）。「四念処」の修行の対象において、たとえば、呼気・吸気に安住する時、「定根」は、心霊の不安を解消し、「慧根」は混乱と不確かさを解消する。「信根」「精進根」「念根」は「定根」及び「慧根」の先行的修行であり、ちょうど国王が王位に登るのを援けるが如くに、「信根」「精進根」「念根」は「定根」及び「慧根」を援けて、最高の成就を証得せしめるのである。

「身念処」の安立と、心霊の主宰（＝コントロール）が出来るようになった後に、もし「禅定」の道に進んだならば、「定根」は八正定に変り、「慧根」は五神通、たとえば、超自然的な神変の能力に変る。もし、「直観（＝vipassana）」の道に向かうならば、「定根」は「空禅定」「無相禅定」「無願禅定」になり、「慧根」は「五智慧清浄道」（すなわち、見清浄、度疑清浄）になる。そして、「見清浄」から始まって、その後に「三随観智」「10 直観智」「四道智」「四聖果」「19 観察智」が続く（《清浄道論》第 21、22 章、参照の事）。ここにおいて、我々は、五根は、如何にして共に発生するかを説明した。

次に、一根ごとの、それが形成される要素を説明する。一人の修行者は、どこに向かって『信根』を探すべきか？『ソータパナ果』の四種類の構成要素において、探すべきである。（《相応部》大品、根相応第四、応観第八経）。
上記は、「信根」が「ソータパナ果」の四種類の構成要素をコントロール（制御）したのだ、という意味を持つ。この四種類の構成要素とは：
１、仏陀の神聖なる特質に対して、たとえば、「阿羅漢」「正等正覚」などについて、不動揺なる信仰（＝信頼と敬い＜注１＞）を備える。
２、法の神聖なる特質に対して、たとえば、「善説法者」など、不動揺なる信仰（＝同上）を持つ。
３、僧侶（＝僧個人）の神聖なる特質に対して、たとえば「妙行者」など、不動揺の信仰（＝同上）を持つ。
４、「出世間禅定」の「最近因」を円満具足する。

この四種類の要素は、一人の修行者が一生のうちに「ソータパナ果智」を証得する事を保証する。

訳者注１：日本語の「信仰」は、＜迷信を信じる＞という意味に取られる事が多いので、本来の意味である＜信頼と敬い＞とした。

「仏陀に対して、絶対的な浄信を具備する」（《中部》第 9《正見経》）
パーリ経典の中で、この部分にある、aveccapasāda は、「不動揺なる信仰」を指す。この種の「信仰」は、我々が仏陀の神聖なる特質を憶念する時に証得する所の「近行定」である。「近行定」とは、我々が仏陀の特質（「阿羅漢」）を憶念した時に、証得する所の、安定的、堅固な専注力をいい、それは入定しているのとよく似ている。一人の修行者が、この種の、安定した専注力を体得した時、信仰は、主動的に優勢になる事を知る。このような修行者は、仏陀の神聖なる特質を憶念する信仰のうちに、彼の心霊をコントロール（制御）する。法、サンガの神聖なる特質への憶念もまた、同様である。

「世間禅定の基礎――戒清浄」は「活命戒」（八関斎戒）を言う。この種の戒・律は、一人の修行者を、今生において、「世間禅定」を証得せしめる。この種の戒・律を持戒して清浄であり、破壊されていない時、修行者は、貪・瞋・痴の汚染から解脱する事ができる。故に、一人の修行者にとって、信仰は、戒・律の内においても突出しているものである事を知らなければならない。戒・律の、この種の必要条件を、観察できない事を「破戒」と言う。技術的に、この種の戒・律が破戒されていないとしても、もし、普通の一般的な条件に基づけば、（＋破戒は）「不浄」であると言える。

俗に言う：「河から上がって初めて、牡牛の価値が分かる。」
凡夫と仏陀の弟子に付いて言えば、ただ、彼らがこの四種類の構成要素を完成した時に初めて、彼らの内心に隠された動揺、散乱が、消えたかどうかが分かるのである。言い換えれば、その時初めて、彼らは己自身の心霊をコントロール（制御）し得ているかどうかが、分かるのである。

「一人の修行者は、『精進根』をどこにおいて、探せばよいであろうか？　『正勤』の四種類の構成要素において、探すべきである。（《相応部》大品、根相応第四・応観第 8 経）
凡夫と仏陀の比丘弟子は、ただ彼らが「正勤」の四種類の構成要素を完成した時にのみ、「精進」の修行の上において、彼らの心内の不安と動揺は、すでに解消したかどうかを、理解することができ、その事（=精進する事）によって、（＋己自身は）心霊をコントロール（制御）する事のできる修行者であるかどうかを、知ることができる。「私の皮膚、筋肉、骸骨が枯れても、私の身体内の血肉が枯れても、私はこの一生において、私の人格の中の身見、悪行、苦界が打ち壊されるまで、私は（＋修行を）放棄しない。」

これは一種、簡単な決断と「正勤」における努力に相当する。護眼尊者（Cakkhupāla《法句経》第一偈注）は、まさにこの努力・精進に依ったのである。一人の修行者が、この種の決断と努力に対応する時、「精進根」による、心に対する、優勢とコントロー

ル（制御）の主権（＝力）を認識する必要がある。「精進」における修行では、この種の修行者は、すでに己の心の不安と動揺は、解消している：仏教の中において、この修行者は、己の心霊（＝心）を支配する事のできる修行者であると言える。

「一人の修行者は、どこにおいて『念根』を探し求めるのか？『四念住』の四種類の構成要素において、探し求めねばならない。」（《相応部》大品・根相応第四・応観第8経）
凡夫と仏陀の比丘弟子は、ただ彼らが「四念住」の四種類の構成要素を完成させた時にのみ、「正念」の修行によって、彼らの内心の不安と動揺がすでに解消したのかどうかを、理解することができ、また、修行者自身の心をコントロール（制御）し得ているのかどうかを、知ることができる。もし、「身念住」の修習を通して、専注力が、身体のどこかの部位に、随意に安住せしめる事が出来るならば、たとえば、呼気・吸気等、この事は、修行者が「正念」でもって、（＋心を）コントロール（制御）できるようになったのだと言える。（＋この時）この修行者の心内の不安と動揺は解消しており、彼は（＋己の）心を支配することが可能である。

「一人の修行者は、どこにおいて『定根』を探し求めるべきか？『四禅定』の中において探し求めるべきである。」（《相応部》大品・根相応第4・応観第8経）
「禅定」の修習をする時、たとえば、呼気・吸気において、少なくとも「近行定」を証得する時、または、過去の輪廻げ原因で誘発された所の、心の不安定的な愛欲、瞋恚煩悩蓋が取り除かれたならば、「禅定」における専注力は、特別に安定し、非常に清らかになる。これが「禅定」によって生起される（＋心の）支配の功徳である。「禅定」の修習において、この修行者は、すでに、内心の不安と動揺を解消しており、彼は、己自身の心を支配する事のできる修行者である、と言える。

「一人の修行者は、どこにおいて『慧根』を探すべきか？『四聖諦』において探すべきである。（《相応部》大品・根相応第4、応観第8経）。
人々が仏法に出会う時、その内の「四聖諦」の知識は、最も崇高なる価値を持つ（＋事が分かる）。この種の知識を証得して初めて、彼らは、身見、悪行、苦界の領域から解脱することができる。故に、四聖諦の知識を獲得する為に、彼らは、各種の修行・・・たとえば、研究、記憶、吟唱、思惟、聞法、討論、問法、直観（＝vipassana）の練習と黙観を実践し、かつ、少なくとも地水火風、虚空、識六界に証入し、またはそれらの流れと喪失、不安定な性質を直観し、それらの持続しえる時間は、一瞬の瞬きも越えない事、（＋それらが）どのようにして、破壊され続けているかを洞察する。

もし、はっきりと明確に六界を観照する事ができるならば、その他の法について（たとえば、蘊、処等）、特別な修習をしなくてもよい。もし、はっきりと明確に「無常」の性質を体験・体得することができるならば、「無我」の体験は、それに続いてやってくる。（《小部》自説経・Meghiya 品、Meghiya 経）

唯一、一人の修行者が、阿羅漢果を証得した時にのみ、全面的に「苦」の性質を体験・証悟する。故に、長時間の精進・努力の後、直観（＝vipassana）によって、一たび六界に内在する所の「無我」「無常」の本質に証入したならば、専注力の境地に安立することができる。これは、「慧根」によって生起した所の主動的な優勢な（＋心の状態である）。無始以来の輪廻によって、心霊上に形成された不安定性は、徐々に消失する。ここにおいて、「心霊の不安定性」とは、物事は無常でありながら、恒常の感覚を擁し；苦痛であるのに、楽しいという感覚を擁し、良くないものであるのに、喜悦の感覚を擁し、無我であるのに、「私」という感覚を擁し、個人というのはないのに、個人という感覚を擁し、存在しないのに、存在するという感覚を擁し；人でないのに、人であるかのような感覚を擁し；非梵天、非帝釈天、非婆羅門であるのに、梵天、帝釈天、婆羅門であるかのような感覚を擁し；非女性、非男性、非去勢牛、非象、非馬であるのに、女性、男性、去勢牛、象、馬のような感覚を擁している。

「不安定性」の中から解脱する事は、仏法の中において保証される事柄であり、かつ真正なる実相を観察されなければならない。もし、はっきりと明確に苦諦を察知・覚知する事ができたならば、当然の事に、その他の三諦もまた、はっきりと察知することができる。「四聖諦」を察知するとは、一般の凡夫は「随覚智」（anubodhi-ñāṇa）でもって認識するのであるが、聖者は、「通達智」（paṭivedha-ñāṇa）でもって認識するのである。「随覚智」は、闇夜に閃光を見る様なものであって、光を見ても、火そのものは見ていない。火を見ないで、ただ反射された閃光を見ているのであるが、しかし、火の存在は知ることができる。直接、火を見たならば、それは「通達智」になる。「信根の修習をし、精進根の修習をし、念根の修習をし、定根の修習をし、慧根の修習をする」（《相応部》大品、根相応、Sūkarakhatā。第 8 経）

上記の仏陀が述べたパーリの言葉、その意味は、「禅定」と「直観（＝vipassana）」の為に、「五根」（心霊の機能）を修習し、開発しなければならない、という事である。「五根」を開発しないのであれば、我々、一人の人間としての「蘊」は、ちょうど国家において、指導者や国王がいないかのようであり；森の中の原始の村に、政府が存在しない、というようなものである。指導者または国王のいない国家は、法律もなく、その中においては、人々は規律を持たない。それは動物のようであって、弱肉強食となるのである。同様に、一人の人間が「五根」を開発しないのであれば、その人の心は、迷い

と惑いがあり、汚染を受けて混乱する。それは悪霊にみちた人の様であり；「itipiso・・・（世尊は確かに・・・）」または「因縁」の偈頌などを、聞くことが出来ないのである。「五根」を開発していない人は、縁起に関する話や、心霊の修習の開示を聞くと、彼らは即刻、それらに対して、批判を始めるのである。

彼らの中では、これまで「禅定」や「直観（＝vipassana）」の修行に対して、全身全霊で取り組みたいというような心は、一度も生起する事はないのである。反対に、一人の「五根」を開発した修行者は、正義を擁し、法によって統治する国王の存在する国家のように、ちょうど中規模の村または部落において、政府による行政単位があるようなものである。この種の人は、各種の紛々とする理論によって動揺する事はなく、仏陀の開示した唯一の道の上を、確信を持って（＋歩む事が出来る）。ひとたび縁起の法または、内心を開発する修行に関する開示を聞くと、彼の心は、非常に清らかに明確になり、柔和になる。彼は必ずや、「禅定」と「直観（＝vipassana）」の修行に対して、全身全霊でもって、実践する。

こういう事であるから、この世界で生起する二種類の欲望とは、衆生の任務ではなく、それは「五根」の開発に依るものである。もし「根」を開発しないのであれば、その中の一種類の欲望が生起する。もし「根」を開発するならば、この種の欲望は消失し、もう一つ別の欲望が生起する。「根」は開発されればされる程、この種の新しい欲望は強化される。「五根」のすべてが打ち立てられた時、「道」と「果」への欲望もまた、直接的に出現する。故に、衆生は「五根」を開発するべきであり、そうして初めて「自然信」、「精進」、「念」、「定」、「慧」を最高の境地にまで引き上げる事ができるのである。

第六章　五力（balāni）

「力」の定義とは：「障礙に対応するが故に、『力』と言う」。パーリ聖典では、以下のように言う：
「どのような時に障礙に出会おうとも、恐怖がなく安定している事を、『力』と言う。」（《増支部》Ekaka　Nipātaṭṭhakathā、Apara　accharāsanghātha—vagga-vaṇṇanā）

「根」と同じように、「力」にも五種類ある：
１、信力
２、精進力
３、念力
４、定力
５、慧力。

「身見」の王国を打ち壊す為に、上記の者はそれぞれ将軍であったり、指揮官であったりする。仏法における比丘または凡夫について言えば、上記の者は、頼る事のできる力である。

「信根」と同じ様に、「信力」にも、二種類ある。
１、自然信。
２、定信。

「自然信」とは、特別の修行や開発を経ないで、環境と貪欲によって生起したもので、故に、布施、持戒などの「自然的善業」のみ生じることが出来る。「自然信」には「貪欲」を克服する力がなく、反対に「貪欲」が「自然信」をコントロールしている。この事は、「貪欲」が如何に強力に「自然信」を支配するかを物語っているが、パーリ聖典の中では、四種類の聖者の伝統的修法に関する記述がある
（聖種法　ariya-vaṁsa-dhammā。《増支部》Catukka - nipāta、Paṭhama-paṇṇāsaka、ariyavaṁsa-sutta）。が、これらは、太陽、月の如く、清らかに明確に天空に存在する。
この四種類の修法とは：
１、食べ物に対して、非常に容易に満足する。（乞食）。
２、衣服に対して、非常に容易に満足する。（糞掃衣）。
３、住居に関して、非常に容易に満足する。（樹木の下に坐る）。
４、修習において、喜楽を発現する。（心身の寂静）。
この四種類の修法は「信」を構成する。

現代において、「信」という、この偉大な国王は、隠匿的で、非常に旗色が悪い。今日、衆生は皆、物質的な生活を享受しており、世間的な仕事、尊厳と栄誉において享受を受けており、楽しい生活、世間の富と権勢における享楽を追い求めている。故に「貪欲」という、この巨大な国王は、大海が島嶼を囲むように、明確である。この事は、「自然信」というものは、この世界においては、脆弱なものである事を物語っている。「定信」とはすなわち、呼気・吸気の「身念住」において、修習に成功し、かつ心霊の不安と動揺を解消したのちに生じるものである。この種の「定信」は、比丘、凡夫をば、三種類の「貪欲」の海から救い出す事ができ、彼らをして、「聖種法」によって構成された「信」の王国に到達せしめることができる。「37 道品」のうちにおいては、まさに、この種の信が必要とされるのである。

「精進」の二種類の形態の中で、「自然精進」とは、修行による開発の敬虔を経ないで、機縁に従っていて、怠慢である事があり、かつ布施、持戒、聖典の講読などの「自然的善業」の事を指す。この種の「自然精進」は、怠慢を駆逐する事はできないばかりか、怠慢に屈服する事があり、怠慢に従順である。これが、懈怠は如何にして自然精進を征服するのか、という説明である。衆生が仏法に出会うと（＋その時初めて）、過去の止まる事を知らない輪廻の中で、己はひたすら「身見」、「悪行」と「苦界」の眷属であった事が知れる。

パーリ聖典は明確に述べている。「聖種法」は怠慢を駆逐することが出来、全身全霊で修習に取り組み、かつこの種の修習の内において、解脱を得るのだ、と。怠慢を駆逐する行為は以下のように書かれている：「諸学」（仏法の訓練）を具備し、かつ戒壇上で受戒して比丘になった者は、「諸学」によって実践する。すなわち：「樹木の根本を出入りして、そこを住居するが故に、今生において、樹下住支の苦行を実践する」（《律蔵》・大犍度・第４品）

「諸学」に従って、もし一人の修行者が、森林の中の樹木を住居とし、「乞食にのみ頼って生命を保ち、他人に依存せず、頭陀行という苦行を確固として遵守する・・・」その上で、注意深く、慎重に「身念住」を修習するならば、これらの精進という行為は、怠慢によって生起する悪業を駆逐することができる。これらはすべて、精進の領域における行為であると言える。現今の世界において、この種の「精進」の領域は、非常に曖昧になってしまった。今日、比丘は「身見」「悪行」に落ち込んでいる事に気が付いており、また、（＋己自身が）「苦界」の中に再生した衆生の階層の中にいる事にも気がついているが、しかし、（＋彼らは）施者が建立した村落の中に居住して、大量の供養を受け、大きな利益を享受している。

彼らには、この社会における、その他の人士（原文前後意味不明）、たとえば、「怠慢」に相当する一切の行為を放棄する能力がなく、そして、この種の「怠慢」の領域は、まるで大海が島嶼を飲み込んでしまうがようである。これがなぜ、「自然精進」が脆弱であるのか、という説明である。「修習精進」だけが、修行者をして、極めて少ない睡眠を保証し、常に（＋心的）覚醒、目覚めを保ちせしめ、主動的で、懼れなく、大胆で、着実に独居し、心内は相当に堅固であるように保証する。（＋修行者は）このようにして初めて、怠慢を駆逐することができる。37 道品においては、このような「修習精進」が、求められるのである。

以下に続く説明によって、我々は「念力」、「定力」、「慧力」の詳細な意味、意義を知ることができる。私はここにおいて、簡単な説明を試みる。「念」の反語は「失念」（「妄念」とも）の悪業である。「失念」とは、「禅定」（たとえば「身念処」）または「直観（＝vipassana）」の中に投入する（＝心が落ち付いてそこに居続ける）事が出来ず、専心一致が出来ず、己の心霊（＝心）を支配することができず、随意にその他の思想、思考の対象に向かって漂い、修行において必要とされる対象の上には、置く事ができない。「自然念」は倶生によってもたらされるが、しかし、これには、失念を駆逐する能力がない。唯一「修習念」だけがそれを駆逐することができる。

「禅定」の反語は「散乱」の不善法であり、それは「修習作意」において、心霊は専一である能力がなく、不安で、散乱している事を含む。諸々の多くの対象に対して、雑念を生じ、心を一処に制する事もなく、心霊をしてコントロール（制御）し、一つの対象に専注せしめる能力もない。「慧」の反語は「迷いと惑い」の不善法である。それは、無知、明晰さの欠如、ぼんやりしている事及び心霊の光明に欠けている事が含まれる。暗黒が心霊に付きまとっている。この種の迷いと惑いは、「自然慧」でもって駆逐する事はできないし、三蔵経典を飽きるほど読んで得た知識「教法智」（pariyatti-paññā）でもって、駆逐することもできない。唯一、「身念住」（＋の修行）における「修習智慧」だけが、この種の「迷いと惑い」を駆逐することができる。

ここにおいて、「五力」と相対応する所の、五種類の不善法の意味・意義を説いた。
この五種類の、相対応する不善法とは：
一、貪欲。
二、怠慢または痛みを受け止めるに無力である事、または対応しなければならない問題に対して、無畏の力に欠けている事。
三、失念。
四、散乱。
五、迷いと惑い。

これら五種類の悪業を退治する事のできる五種類の法を、「力」と言う。もし、（＋修行者の中に）「五力」の中の一つでも脆弱なものがあると、ちょうど「未了行者」のように、「禅定」と「直観（＝vipassana）」において、成就を獲得することができない。故に、ある種の人々が、貪欲の領域から抜け出す事ができるのは、彼らの「信力」が強くて力があるのが原因である。彼らは、財産、食事、色（＝身体）と世間的尊厳と栄誉への執着から抜け出している。しかし、彼らは、他の四種類の力において、欠陥があるが故に、円満具足の境地に至る事はできない。

ある種の人々は、貪欲、怠慢の領域から抜け出すことができる。これは、彼らの「信力」と「精進力」が、強くて力があるが故である。彼らは、持続的に善法を順守する――すなわち、樹下住支及び頭陀行を。しかし、彼らは、その他の三種類の力において欠陥があるため、「身念住」を修習したり、または「禅定」と「直観（＝vipassana）」を修行する能力は、無いのである。

ある種の人々は、前の三種類の力は非常に強い。故に、「身念住」において安立する事ができる。彼らは、呼気・吸気の観察や、身体の骨格を観ずる事によって、専注に到達することができる。しかし、彼らは、残りの二種類の力に欠陥がある為、「禅定」と「直観（＝vipassana）」において、安立する事ができない。ある種の人々は、禅定に入る事ができる。これは、彼らの、前四種類の力が、非常に強烈であるからである。しかし、彼らは「慧力」においては、非常に脆弱な為に、「直観（＝vipassana）」には、安立する事ができない。

ある種の人々は、慧力において、非常に強力で力があり、かつ、三蔵に精通しており、第一義諦をよく理解しているが、しかし、その他の四種類の力において、欠陥があるため、貪欲、怠慢、失念、散乱の中から、抜け出すことができず、これらの悪業の内に生活しており、かつ、これらの悪業の中において、死ぬ。このように、一人の修行者は、これらの「力」の中の一つでも欠けるならば、これら個別に相対応する悪法の中から、抜け出すことはできないのである。

「五力」の中で、精進力と慧力は、「如意足」でもある。故に、この二力が強大であり、相互に補え合える時、その他の三力が弱いために「直観（＝vipassana）」において、安立出来ないという状況は生まれない。仏陀在世の衛舎城では、5 千 50 万人の修行者が、世間的罪悪から、解脱・証得したのである。「如意足」、「根」、「力」等の機能・働きを理解しない修行者は、なぜ、彼らの「欲望」が脆弱であるのか、また、それら（＋に起因する問題点）をどのようにして退治するのかを、理解できない。

彼らは、どのような法を安立するべきなのかを知らないし、ましてや、（＋修行の目的である、法を）安立したいという欲望もまた、生起せしめた事がない。たとえば、一種の牡牛がいたとする。それは「牛王」（usabha）と言い、この牛王の価値は、普通の牡牛の何千万頭分よりも大きい。もし、この牛王の特徴を明確に見分けることが出来たならば、牛王は、適切な方法で飼育され、育成され、牛王の四肢は発達し、身体能力も強化される。その後、牛王は、多くの家畜の保護者となり、獅子や豹の侵入を防ぐことができる様になる。牛王が牧場にいさえすれば、多くの疾病と伝染病を防ぐことができる。

もし、この牛王の主人が、これらの状況に関して何一つ知らず、故に、適切な飼育も施さず、普通の牛として育ててしまうとしたら・・・。もし、主人が、この牛を普通の牛と同じような対応・・・畑に連れて行き、牛車を引かせたりしたならば、この牛王の明確な特徴と四肢は、発達する事がなく、牛王の身体能力は、潜在したままになる。そして、この牛王は、他の普通の牛と同じ様に成長し、死ぬ。

しかし、一人の、（＋牛飼いの専門知識を持つ）巧みな主人は、この牛王を、その他の牡牛と分離して、牛王を特別な牛舎に入れる。この主人は、清潔な砂を補てんし、屋根には天井を加え、牛舎の排泄物を外に出し、人が食べる所の米、豆で牛王を飼育する。この主人は、牛王を綺麗に洗い、その後に香料を塗る。このようにして、牛王の明確な特徴と四肢は発達し、巨大な身体能力も育成される。今日の仏法において、未了の修行者は、この牡牛の主人のようであり、未了の修行者の五力は、牛王のようである。

論蔵の中の《正念分別論》、《正勤分別論》、《如意足分別論》、《根分別論》、《覚支分別論》、《道支分別論》、経蔵の中の《大念住経》、《念住相応》、《正勤相応》、《根相応》、《力相応》、《覚支相応》は、牛王の明確な特徴、適切な飼育の仕方、牛王の心身の強化について書いてある所の、世間に存在する説明書と同じである。これらの未了の修行者は、無知が原因で、禅の修行を通して、五力を開発する事ができない。そして、その為に、仏法の初歩的段階、たとえば、布施、持戒、経典の研究等で満足してしまうが、それはちょうど、牛王を知らない主人が、適切な飼育をしないのと同じである。

この世界では、非常に多くの世間的事業が存在している。これらの事業は、富の力によって完成させることができる。ある種の事業は、知識の力で完成させることができる。土地の耕作においてさえも、幾種類かの力を必要とする。ある時には、先に財産、富の力を蓄積してから、その後に知識を蓄える。先行した教育と研究は、知識の力を凝縮させるものである。同様に、仏法においては、「禅定」と「直観（＝vipassana）」を修

習する事、また、聖道、果と涅槃を証得する為には、「五力」必要とする。これら「五力」を先に累積して初めて、上に述べた巨大な仕事は発展することができる。五力の力さえも具備しないならば、これら巨大な仕事を成し遂げようとする欲望が生起するはずもなく、そうであれば、この巨大な仕事は、今生で完成するはずがない。彼らは生きていくうえで、細心の注意を払わず、決断力にも欠けている。

もし、彼らにこれらの任務は完成する事ができるのだと説いても、彼らは聞く耳を持たない。彼らは、これらの障礙を齎す己の考えが彼らのもとにやってくるのは、彼らが「力」に関して、まったく無知で荒とうであるからである。彼らは「ハラミツ」または「二因」または現世の門前で恥ずかしさを感じている（ある種の人々は、「ハラミツ」が熟さなければ聖道と聖果は証得されないと固く信じている；ある種の人々は、現代は「二因」の時代だと信じている；ある種の人々は、今生において、聖道と聖果は、証得する事はできないと信じている。）

ただし、もし、これらの人々が、「正念」の中のどれか一つの項目において、たとえば、「出入息念」において安立する事ができたならば、そして、そのことによって「信力」、「精進力」、「念力（＝専注力）」を打ち立てることができたならば、この種の頑迷な思想は消失して、善業の思想が必然的に生起するに違いない。というのも、彼らはすでに強力な力を開発したからである。上記は、如何にしてこの種の力を開発するのか、という方法を述べたものである。この種の修行者は、「名」と「色」に証入する事は尚、無理ではあるが、しかし「財、食、味への欲望」、「世間的な財への欲望」へのコントロール（抑制）、また、微弱な「信」等は開発する事ができる；「怠慢」と「迷いと惑い」へのコントロール（抑制）もまた、「禅定」と「智慧」を、強化することができる。

これらの「力」が開発された時、修行者の内心もまた、必然的に変化が現れるのである。たとえば、一人の、難病に苦しむ患者は、一般的な事柄や世間的な事業に関して、興味を失うに違いない。しかし、もし、適切な療法の下、難病が癒えたならば、諦めの気持ちから離れて、（＋人生に対して）改めて奮起するに違いない。このような状況は、（＋一人の人間の内に生じるのは）当然の事である。

「欲望」、「怠慢」、「失念」、「散乱」、「迷いと惑い」というこの種の悪業、それは五種類の病気のようである；仏法の中の「禅定」、「直観（＝vipassana）」は、世間的な仕事、事業のようである；たとえば、四念処の「出入息念」は、ちょうど病気の療法のようであるが、そのようであるが故に、その他類似した事柄も類推を通して、容易に理解できるのである。

仏陀は以下のように言う：
「信力を修習せよ！精進力を修習せよ！念力を修習せよ！定力を修習せよ！慧力を修習せよ！」
（経蔵参照の事。《相応部》・大品・力相応第 6、Gaṅgā-peyyāla-vagga、Balādi-sutta 第一経から第 12 経まで）

この世界では、建築士の力は、完全な工具に依存する。たとえば、錐、鑿、斧、鋸等に。この建築士が、この種の力（＝道具と道具を使いこなす力）を持っていて初めて、寺院を建築したり、家を建てたりすることができる。大工でも、鍛冶屋でも、彫刻家でも、それぞれがそれぞれに相応しい力をもっているものであって、彼らの力というものは、完全なる工具・道具と装備が含まれるのである。ただこのようであって初めて、彼らは己自身の仕事を完成させることができる。

同様に、仏法の中において、「道智」（四向）、「果智」（四果）を証得する為、「禅定」と「直観（＝vipassana）」の修習を実践する場合に必要とされる工具は、「修習信」、「修習精進」、「修習念」、「修習定」、「修習慧」であり、また、それは「四念住」の中の「出入息念」によって、開発されるものである。「五力」とは、ヨガ行者の力（yogāvacara とは、「禅定」の修習または「直観（＝vipassana）」の修習、またはその両方を修習する人を指す）である。こうしたことから、仏法において、禅定、直観（＝vipassana）を修習して成果を得ようと思う修行者は、五力を開発しなければならない。これが、上に述べた所の偈頌における「修習」（bhāveti）の意義である。

第七章　七覚支（Sambojjhaṅga）

「いわゆる『正覚』とは、すなわち、明確にかつ明晰に四聖諦を覚知・察知する事ができる事を言う。いわゆる『覚支』とは、出世間の智慧であり、それは、智慧の道の構成要素である。」
鳥は、まず先に卵の形式によって、母鳥の子宮内に産み落とされ、その次に、卵の殻を破って出てくる。その後に、雛鳥の羽毛が生えるが、生え揃うと、彼らは巣から飛び立ち、各々が、飛びたい方向へ向かって、飛んで行く。同様に、ヨガ行者の例で言えば、

彼らが「身念住」において安住する時、または「禅定」の修行を徹底的に完成させた時、まずは、長期の世々による輪廻によってもたらされた心霊（＝心）の混乱から解脱することができる。

次に、彼らが「直観（＝vipassana）」を証得して、「名」、「色」、「蘊」など等を覚知、察知する事ができたならば、無知から来る所の、粗くて劣っている状態から解脱することができる。最後に、「七覚支」が開発され、熟する時、ヨガ行者は、出世間的な智慧の道において、完全に円満（＋に成就）し、羽も十分に生えて、いわゆる「正覚」と言われる智慧の道を証得し、その事によって、世間的な、凡庸で卑俗な状態から解脱することができる。彼らは、凡夫の境地から解脱して、聖者の出世間の境地、または涅槃の境地を証得するのである。

「七覚支」とは：
一、等覚支
二、択法等覚支
三、精進等覚支
四、喜等覚支
五、軽安等覚支
六、定等覚支
七、捨等覚支
である。

「念の内在的要素」（Sati cetasika。念心所）は「念住」、「念根」、「念力」、「正念道支」があり、これらはいわゆる、念等覚支である。「慧の内在的要素」（Paññā cetasika。慧心所）は、「観神足」、「慧根」、「正見道支」で、これらはいわゆる「択法等覚支」である。その他に、慧の種清浄道（第五章参照の事）の、最初の始まりは「見清浄」であり、次が「三随観智」、「十観智」であり、これらは皆「択法等覚支」である。ちょうど、綿花の中にある種が、取りだされて綿花が整理されて後に、初めて綿花になるように、修行者が「直観智」によって、何度も反復して、五蘊の過程を観照する事を、「択法」と言う。

「精進の内在的要素」（Vīriya cetasika。精進心所）は、「正勤」、「勤神足」、「精進根」、「精進力」および「正精進道支」であり、これらはみな、いわゆる「精進等覚支」である。「念住」が安住した後、たとえば、「身念住」等において、覚知・省察の体験が持続し、増加する時、喜悦と楽しさが出現すが、これがいわゆる「喜等覚支」である。

内心の混乱、考えと思考・情緒が止まる時、修行している（＋修行者の）心身には、平安、静けさの過程が顕現する。これがいわゆる「軽安等覚支」であり、それは「身軽安」と「心軽安」の内在的要素である。いわゆる「定根」、「定力」と「定道」の「禅定の諸法」は、「定等覚支」である。また、「禅定」の修行、「心清浄道」と関連する「遍作定」、「近行定」、「根本定」または「八正定」、及び「慧清浄道」と関連する「空定」、「無相定」、「無願定」もまた「定等覚支」と呼ばれる。「直観智」または「道智」と「果智」を伴って生起する「定」は、「空定」、「無相定」と「無願定」という、これらの名称によって呼ばれる。

修行者が「業処」の修行において、何らかの方法やシステムの欠如がある時、心身において、鍛錬という名の実践を、しなければならない；しかし、ひとたび方法とシステムを具備したならば、修行者は自在になり、この種の心身の訓練において、努力する必要はなくなる。この種の自在が、いわゆる「中捨性心所」（平安な内在的要素）であり、「捨等覚支」である。一人のヨガ行者が、十分に「七覚支」を擁する時、仏法において、一人の沙門としての喜悦と楽しさを享受することができる。そして、この種の喜悦と楽しさは、如何なる世間的な喜・楽とは比べる事ができない程であって、それはちょうど転輪聖王のように、四大洲を統治し、七つの宝珠を擁し、譬える事の出来ない程の、リラックスと自在を享受するのである。

故に、《法句経》では以下のように言う：
「比丘は、（＋執着を）捨て去る事や、謙虚になる事を通して、彼の心は寂静になり、超人的な楽を得る。」（《法句経》第 373 偈頌）
「もし、人が常に正念を保ち、諸々の蘊の生・滅において、喜と楽を獲得するならば、彼の不死を得る。」（《法句経》第 374 偈頌）

もし、「直観楽」（vipassanā　sukha）において得た所の、体験の楽しさと喜悦（この種の楽は、「七覚支」において完成する）を、256 個の部分に分けたならば、その一つひとつの楽しさと喜悦はすべて、世間の国王、天人、梵天の楽しさと喜悦を、超えている。ただ「正覚」における喜悦と楽しさだけが、かくの如く巨大なのである。
故に、仏陀は以下のように言う：「諸々の味の内、法の味が一番勝る！」（《法句経》第 354 偈頌）

多くの物語（《相応部》・覚支相応）が以下の様に言う：ただ「七覚支」の偈頌を聞いただけで、大部分の疾病と慢性病を治すことができる。ただし、これら偈頌を聞いた者が、完全に「七覚支」の意義を知っておかねばならず、その上で、その人に、強大で、明晰な信心（=確信）が生まれるならば、これらの疾病と慢性病は、癒されるであろう。

バランスのとれた方式で「七覚支」を獲得するならば、このヨガ行者は、「身念住」において、決して欠陥・問題点は生じないし、また、彼の、「無常」、「無我」の覚知と察知、及び、心身のエネルギー（＋の偏差）において、決して欠陥が出現することがない事が、保証される。というのも、彼の心霊（＝心）は、「三法印」の中で安立し、自在であり、彼は今こそ、涅槃の光明が齎す喜悦を覚知・察知する事を経験するからであるが、これらは、彼のこれまでの無尽の輪廻の中で、たとえ夢の中においてさえも、出現した事のないものである。

心霊（＝心）の喜悦と、自在の故に、彼は「業処」の対象に対して、非常に落ち着いた態度で、安定して観照することができるが、この種の「落ち着き」の境地は、正念を通した努力によって、修行者が動揺から抜け出す、解脱した故であり、また、「無常」と「無我」を覚知・察知した為に（＋心・身の）エネルギーが高揚する事によって、得る事ができたのである。

上に述べた「七覚支」と関連する境地は、相互に協調・影響し合うもので、また、それぞれの機能・功能も、特別に明晰である。普通のレベルの修行者であっても、「身念住」に安立する刹那から始まって、たとえば「正念」の「諸法」は、「覚支」であると見做されるのである。仏陀は、「七覚支」を修習する必要がある旨、開示したが、この事は、「覚支」として認められるのである。

仏陀は、「七覚支」の修習が必要であると、開示した時、以下のように述べた：「念等覚支を修習する時、遠離依止（＝遠く離れて依止する）、遠離貪念依止（＝貪念から遠く離れて依止する）、滅尽に依止（＝滅尽に依止する）し、最後に般涅槃に入る・・・。捨等覚支を修習する時、遠離依止、遠離貪念依止、滅尽に依止し、最後に般涅槃に入る。」（《論蔵》、《分別論》第 10 品分別覚支、参照の事）。
その意味は、一般的な方向性としては、「身念住」に安立する体験（たとえば、呼気・吸気）は、すなわち、「七覚支」の安立と、同等であるという事である。「七覚支」の個別的な安立については、《分別論疏》参照の事。（Sammohavinodanī - Aṭṭhakathā《分別論註釈》第一品 Suttanta - bhājanīya - vaṇṇanā）。

上に述べたパーリ語の意味は：「修行者は『念等覚支』を修習しなければならない。彼は一切の活動、焦り、渇望、貪婪の止息に依りながら、または輪廻の苦の止息（＋を目指し）、または四種類の依存の基礎（四種類とは、感官の快楽への執着、汚染された心による激情への執着、行為の功徳への執着、身体の五蘊への執着）を放棄する。」
である。

「遠離依止」（viveka nissita）、「離貪依止」（virāga nissita）、「滅尽依止」（nirodha nissita）はそれぞれ、「『有の成就』と『財産の成就』に向かわない事であり、今生のうちに、潜在する『身見』の大部分の領域において、それを打ち壊し、輪廻から解脱する事である。」「成就依止」（vivaṭṭa nissita）とは、間を置かずに念々として正念を保ち、感官の執着から解脱する事である。また、「覚」、「覚支」と「菩提支」の意味は、皆同じである。

第八章　八正道（Maggaṅga）

「道」（magga）の定義は以下の通り：「これらの法は、『身見』などの障礙を取り除いて、涅槃に証入すること、苦界と輪廻の苦を止息する事ができるようにする。故に、これらの法は、『道』と呼ばれる。」「道」は、八種類に分けることができる。
一、正見。
二、正思惟。
三、正語。
四、正業。
五、正命。
六、正精進。
七、正念。
八、正定。

この八種類の要素は、すべて「智見清浄道」（知識と、凝視による出世間清浄道）において出現するが、前行の「世間清浄道」においては、「正語」「正業」「正命」は「戒清浄道」の中においてしか出現せず、「心清浄道」の中においては、出現しない。故に、「37 道品」の中の「戒清浄道」は、「遠離依止」「離貪依止」の戒律を、意味する。
その根拠とは：
「正語を修習し、遠離依止し、離貪依止し、最後に涅槃に入る。
正語を修習し、遠離依止し、離貪依止し、最後に涅槃に入る。

正語を修習し、遠離依止し、離貪依止し、最後に涅槃に入る。」（《分別論註釈》第一品・Suttanta-bhājanīya-vaṇṇanā　参照の事）

ここでは、「有の成就」（bhava-samāpatti）へ向かう（＋のを防ぐ？）事や、または、輪転依止の戒律の事を言うのではない。あれら、今生における聖道と聖果を証入しようとする事を意識的に放棄する（＋人々の）「戒清浄道」は、厳格な初梵行戒ではないため、「37 道品」には属さない。しかし、もし、努力して来世において涅槃を証するならば、上記のものは、「ハラミツ戒」となる可能性があり、その時は「遠離依止戒」の一部分を構成するであろう。「正語」、「正業」、「正命」の三道は、純粋に戒律のレベルであり、故に、厳密に「戒清浄道」を構成する。それらは、三種類の「離心所」（virati　cetasikas）と呼ばれる。「正思惟」は「尋」の作用である。というのも、「正思惟」は「智慧」の先駆であるので、「智慧」の範疇に入るが故に。

「思惟」には合計三種類あり、それは、「出離思惟」、「無恚思惟」と「無害思惟」である。ちょうど一人の、監獄に収容された人間のように、または敵に包囲された軍隊のように、または森林火災に巻き込まれた人のように、或いは、網に捉えられたか、池から出られなくなって、困惑する魚のように、または鳥かごに押し込められた小鳥のように、(食べる事も眠ることもできなくなった時) その時はただ只管、どのようにして、この状態から逃げ出すのかを、考えるのみである。

「正勤の精神」によって、古く、かつ無尽である所の「已に生じた悪業」と、未来における無尽の「未生の悪業」から抜け出したいと思う事、このような思惟が生起する事を、「出離思惟道（＝出離に関する思惟の道）」と言う。この種の「思惟」は、今生において「輪廻の苦」から抜け出す事ができるように、（＋その方法を）探し求めるものである。

「慈心禅定」と関連する「思惟」は「無恚思惟」で、「悲心禅定」と関連するのは「無害思惟」で、その他の禅定と関係のある「思惟」は「出離思惟道（＝出離の思惟の道）」である。「正見」、「正精進」、「正念」、「正定」というこの四種類の正道は、すでに「七覚支」の項において、解説した。「正見」と「正思惟」は「慧蘊」で、それらは「慧」の集合体を構成する。「蘊」とは集合体の事である。「正語」、「正業」と「正命」は「戒蘊」と呼ばれるが、それらは「戒」の集合体を構成するからである。「正精進」、「正念」と「正定」は、「定蘊」と呼ばれるが、それらは「定」の集合体を構成する。

「活命戒」は「世間戒蘊の道」と言い、「活命戒」を実践すれば、「随眠見」の巨大な王国を打ち壊すことができる。それは「戒清浄戒」に属する。「活命戒」には二種類ある。一つは在家者の為に戒律で、もう一つは出家者の為の戒律である。身体における三悪業と、言語における四悪業を捨て去る事、これが在家者の「活命戒」の内実である。「八関斎戒」と「十戒」は、「活命戒」を更に精錬させ、完全にすることができる。《律蔵》の中において定められた 227 条の戒学は、出家僧の「活命戒」を構成している。この 227 条の戒学は身業と口業を含み、《註疏》において、すでに分類されている。《律蔵》の内に制定されたその他の戒・律は、「活命戒」を更なる（＋上級の）レベルに完成させることができる。ここにおいて、「戒蘊道」の説明を終了する。

「定蘊道」に関しては、合計二種類の実践方式がある。それぞれ、一つは、「純粋直観行」（saddha-vipassanā　yānika ただ直観だけを修行する人）で、もう一つは、「止観行」（samatha　vipassanā　yānika　同時に止観の両方の修行をする人）である。「戒清浄道」の具足、及び「身念住」に安立した後、「禅定」の道を歩かず、たとえば「見清浄道」等の直観（＝vipassana）の道を行く者は、「純粋直観行（＋者）」である。しかしながら、もし、「禅定」の道を行く場合、たとえば、第一禅・天正受等を証入した後、「見清浄道」等の直観（=vipassana）の道をも遵守する者、これを「止観行（者）」と言う。

この二種類の道において、一番目の「止観行（ママ～「純粋直観行」の誤植か）」の例で言えば、皆が周知している所の三種類の禅定、例えば「空三昧」、「無相三昧」、「無願三昧」でるが、この三種類の「禅定道」を歩めば、「禅定」と「心清浄道」の機能・功能を、具足することができる。しかし、二番目の「止観行」の例では、「遍作三昧（＝遍作定）」、「近行三昧（＝近行定）」、「根本三昧（＝安止定）」という、この三種類の「禅定道」を歩む事によって、「禅定」と「心清浄道」の機能・功能を具足することができる；そして、その後に、「直観（=vipassana）」の段階において、皆が周知している所の「空三昧」、「無相三昧」、「無願三昧」の三種類の禅定（の修行をすれば）、「禅定」と「心清浄道」の機能・功能を具足することができる。しかし、先に述べた「戒清浄道」と「身念住」の段階において、この三種類の「禅定道」は、「刹那三昧（=刹那定）」の機能・功能を具足しているものである（＝具足している必要がある）。ここにおいて「禅定蘊道」に関する説明を終了する。

「戒清浄道」と「身念住」を安立させた後、この二種類の「慧蘊道」は、同時に「純粋観行」と「止観行」における「智慧」の機能・功能を具足する事になる。上記の事柄は、「世間道」、「出世間道」の双方に、関連するものである。今、私は「出世間道」の中の、ソータパナ道について述べてみたいと思う。気を付けていただきたいのは、こ

の著書の（＋読者）の対象は、「乾観のソータパナ者」（bon-sin-san）と呼ばれる、聖者の内の最も低いレベルの者である。今、無数の衆生、たとえば、ヴィサーカ、給孤独、帝釈天王、Cūḷaratha 天人、Mahābovinda 天人、Anekavaṇṇa 天人（《天宮事》、四天大王、《相応部》Sagāthā 品　参照の事）等、彼らは四王天界、33 天界及び、それ以上のレベルの天界に住んでいる。

しかし、彼らは、輪廻の内で出生しながら、楽しく、また自在である。彼らは、すでに欲界に七回生まれ変わる衆生となり、それぞれは、第四禅天または広果天において、6 回生まれ変わるが、第一禅梵天、第二禅梵天、第三禅梵天に再生する回数は、未だ未定である。なぜ、彼らは「ソータパナ者」と呼ばれるのか？　五大河川及び 500 の支流は、皆、ヒマラヤ山を源流としており、それらの水流は、遡って流れる事はなく、引き続き、大海に向かって流れるが故に、「流」（sota）と呼ばれる。

同様に、聖者は、もはや凡夫の境地に戻る事はなく、引き続き持続的に、「無余涅槃」に至るまで、（＋最高レベルの）「聖者」に向かって前進する。凡夫について言えば、彼らは、最高レベルの梵天に生まれることは出来るが、しかし、最低レベルの地獄に生まれる事もあり得る。しかし、聖者であるならば、彼がどこに生まれようとも、二度と堕落する事はない。もし、比較的低いレベルの天界に生まれたとしても、比較的高いレベルの天界に、再び生まれ変わる。

凡夫は、色無色界天において「三二因梵天」の境地を証得する事ができるけれども、彼らはなお「無界因の悪趣」に落ち込み、豚、犬などの衆生に生まれる事がある。ただ、聖者であれば、もはや凡夫のレベルの落ちる事はなく、再度生まれ変わると、最も高度のレベルの聖者の境地に、証入することができる。故に、どの天界に生まれたとしても、または再生する度に証得する境地において、聖者は後ろ向きに下がる、堕落する、という事がなく、反対に、一つの天界からもう一つの天界へと、一つの境地からもう一つの境地へと、多くの生を経て、彼らは五蘊から脱離して、「無余涅槃」に到達する・・・すなわち、最高の天界と、最高の境地を証得するのである。この登り道が通るべき一本道は「法預流（ダンマソータ）」と呼ばれるが、それには「正見ソータ」、「正思惟ソータ」、「正語ソータ」、「正念ソータ」、「正定ソータ」が含まれる。

「正見預流」は「正見」の巨大な王国に安立し、四聖諦の光明を覚知・察知している。「正見」を具備する王国は、「身見」の巨大な「随眠」の王国の中に安立する。ちょうど、暗黒が去ると、太陽は上り、暗黒が跡形もなくなくなると、光明は安立される、のと同じである。多くの生を経ながら、「無余涅槃」を証入するまで、「正見」の巨大な

光明の王国は、引き続き安立される。この生からあの生において、この種の光明はますます強化され、ますます安定する。

これはちょうど、ある人がいて、彼が彼の母親の子宮から生まれ出て以来、白内障で失明しているとする。一たび、彼がよい医師に恵まれて、彼の白内障が治ったならば、光明は戻って来るのと同じである。白内障が消えたその時から始まって、大地、峰々、天空、太陽、月と星々等の景観は、彼に向かって開かれた。これ以降、終生、このままでいられるのである。同様に、ソータパナ智の聖者は、三法印と四聖諦の景観を証得したならば、上に述べた盲者の例の如くに、天空、太陽、月等が見えて、これらの聖者は、自由自在に諸法を覚知・察知することができる。「正見が安立された時、正思惟は展開・発展する！」（《相応部》・大品・道相応第一・無明品第一・無明経第一）

この点に関して、もし「正見」が安立されたならば、「正思惟」（世間の病苦から脱離した（＋い？）という意念と計画、かつその他の人が痛苦を味わうのを防ぐ事を含む）も安立され、多くの生を経て、最後には「無余涅槃」を証得する。ここにおいて「正思惟」は、如何にして安立されるのか、を説いた。
《註疏》では、「『展開』とは『成長』である！」と述べている。

「正思惟が安立する時、正語も展開・成長する！」
もし、（＋修行者が）世間的な病苦の中から脱離し、また、他人の楽しさ、自在を見る（＝見たい？）という意念と計画が、すでに安立されたならば、言葉の悪業から解脱した所の、正語が生起するし、その上それは、非常に迅速に安立される。ここにおいて「正語」は如何にして安立されるのかを説明した。

「正語が安立する時、正業も展開・成長する！」
言葉の悪業から解脱して、正語が安立したならば、身体による悪業から解脱する行為もまた生起するし、かつそれは、非常に迅速に安立される。ここにおいて「正業」が如何にして安立されるのかを説明した。

「正業が安立する時、正命も展開・成長する！」
観念、意向、言語、行動が純化されたならば、生命の形態もまた純粋になり、修行者は、低層の生命形態から、不断に解脱することができる。ここにおいて「正命」が如何にして安立されるのかを説明した。

「正命が安立する時、正精進も展開・成長する！」観念、意向、言語、行動と生命の形態が純化されたならば、悪業、邪命から解脱した事による精進もまた、不断に安立される。ここにおいて「正精進」が如何にして安立されるのかを説明した。

「正精進が安立する時、正念もまた、展開・成長する！」
このように、「戒」・「定」・「慧」の修行により根を強固にした「正念道」は、この生からあの生へと、安立される。ここにおいて「正念」が如何にして安立されるのかを説明した。

「正念が安立する時、正定もまた、展開・成長する！」
このようにして、「戒」・「定」・「慧」の修行による（＋成果）、また、心霊（＝心）に対する、巨大な掌握力（＝コントロール力）である所の、「正定」もまた安立される。ここにおいて「正定」が如何にして安立されるのかを説明した。

ここにおいて、我々は、多くの生、多くの世を経て、衆生が「ソータパナ聖者」を証得する段階の、その刹那から始まって、最後に「無余涅槃」を証得するまで、「預流法」の「八正道」は如何にして、迅速に安立されるのかを説明した。「身念住」安立の、その刹那から始まって、上に述べた過程を展開・体験する。「決定」（niyāma）の境地に、いまだ到達していないならば、衆生は聖者ではありえない。「預流道」は「預流聖者」の起点である。衆生がひと度「預流道」を証入したならば、彼らは、聖者の領域に進入することができる。

「彼らは、初めて『預流聖者』を証入する時より、『預流者』と呼ばれる」
ここにおいて私は、「彼らはなぜ『預流者』と呼ばれるのか？」という疑問に答えた。衆生がひと度、聖者の境地に証入するならば、凡夫の境地を超越する事になる。彼らはすでに俗人でもなく、世間的な衆生でもなく、出世間の衆生となる。彼らはもはや、輪廻の苦しみに従う衆生ではなく、涅槃寂滅の衆生となる。（＋今後）多くの生、多くの世を経たとしても、涅槃の初期的な段階に、戻る事はない。彼らは、「身見」を擁する所の「随眠」のレベル、または凡夫の境地に戻る事はない。彼らは「有余涅槃」の第一段階に安立し、生々世々、代々において、人類、天人、梵天の楽しさを享受する。これより深い説明、研究については、自著《四聖諦ハンドブック》、《第一義諦灯注》を参照の事。

唯一、「道」または「果」に証入する刹那においてのみ、「八正道」は（＋八つが）同時にこれらの聖者に（＋その実体の全容が）顕示される。しかし、「世間善業」、「戒

蘊三道支」、は「戒善業」とのみ関係がある。「定蘊三道支」または「慧蘊二道支」は、多くの種類の善業と関連がある。「戒蘊三道支」は、「戒善業」としか関連しないが、聖者に関して言えば、彼らは、生々世々、代々、安定的に護持し、違犯（avītikkama）する事がない。ここにおいて「八正道」に関連する説明を終える。「37 道品」における純粋な法、それは : 欲、心、平静、信、軽安（止）、慧、思惟（尋）、精進、三離（正語、正業、正命）、念、喜、制心一処（心一境性）等の 14 の種類の法数を含む。

第九章　如何にして 37 道品を修行するのか

仏法に出会った衆生は、先に「戒清浄」を安立させ、37 道品を修習して、（＋将来において）「預流聖者」を証得する。今、私は、簡単にではあるが、37 道品の修行方法を解説する。「七清浄」を修習すれば、それがすなわち、37 道品の修行になる。特に「心清浄道」は、「禅定行者」の修行者にのみ、関係がある。「道非道智見清浄道」は、「増上慢」の修行者と関係がある。これら（＋増上慢）の修行者は、「聖道」、「聖果」を証得していないのに、己自身は証入したのだと思い込んでいる。「戒清浄道」、「別解脱清浄道」、「行道智見清浄道」、「出世間智見清浄道」は、多くの修行者に関連する。この五種類の清浄道の内、「戒清浄道」は、「戒蘊道」において、処理される（＝実践される）ものであるが、これには「活命戒」の修持も含まれる。

一般的に言って、「心清浄道」は「身念住」の安立を含む。ある種の修行者は、呼吸を観る事によって「身念住」を安立せしめる。一般的に、一人の修行者が、どのような時間においても、どのような種類の身体的姿勢においても、呼気と吸気に心を専注させる事ができるならば、「身念住」は、すでに安立されたと言える。ある種の修行者の、「身念住」の安立方法は、《経》の文章（《長部》第 22 経、《大念処経》）に言う所の、四種類の姿勢において、ある種の人々は、身体の動きにおける「正念正知」において、安立する。これ以外に、ある種の人々は、身体の 32 の部分を観照して、「身念住」を安立せしめる。

この方法のうちで、頭髪、体毛、爪、歯、皮膚を観照するものは、「皮の五法」（tacapañcaka）と言われる。もし、これらの身体部分において、安定的に自在にそれらを観照する事ができるならば、身体のどのような部分においても、「身念住」を安立せしめることができる。専注力は、身体の骨格に向けることもできる。もし、専注力を安定的に骨格に安立させる事ができたならば、「身念住」は、安立したと言える。もし、修行の最初から、身体の「色蘊」と「名蘊」を分析的に区分することができ、かつ専注力が、この種の修行に対して非常に安定的であるならば、「身念住」の修行は終了する。

もし、一人の修行者が、「地」、「水」、「火」、「風」、「空」、「識」の六界を分析的に覚知・察知する事ができたならば、「見清浄道」を完成させた事になる。もし、上記の「界」の生起する原因を、明晰に覚知・察知する事ができるならば、「別解脱清浄道」の修行は完成する。この修行者は、「地」、「水」、「火」、「風」、「空」の生起する原因を明晰に察知し、（＋それらが生起する原因が）「業」、「心」、「時」、「食」である事を明晰に察知し、また「六識」の生起する原因を察知する事（＋も求められるが）、これはすなわち、知覚の六つの対象の事である。

「行道智見清浄道」とは、「無常」、「苦」、「無我」の三法印を意味する。もし、上に述べた六識において、三法印を明晰に察知する事ができたならば、「行道智見清浄道」に証入した事になる。「出世間智見清浄道」は、四種類の道智を言う。ここにおいて、私は、簡単に五種類の「清浄道」に関する説明をした。更に深い説明は、《諸相ハンドブック》、《明道ハンドブック》及び《飲食ハンドブック》を参照の事。37 道品の各々の品は、仏陀の遺産であり、かつ、仏法における無価（＝値段をつけられない程貴重なもの）の宝石である。

＜下線訳者注：道非道智見清浄、行道智見清浄などは、修行者の性格に合わせて修行するのではなく、悟りを目指す修行者の必修だと思われる。いずれ「禅修指南」（本雅難陀尊者著）を翻訳して解説したい。＞

第十章　仏法の遺産

今、私は「仏法の遺産」について、点検してみたいと思う。「仏法の遺産」とは、仏法の伝承（＝伝統）を受け入れる行為を言う。「『施与されたもの』とは、すなわち、『遺産』の事である」（Dātabbanti　dāyaṁ）。父母は、財産を遺産として子供に贈ろうとする。
「遺産を受け取るにふさわしい者をば、『継承者』と言う」(Dāyaṁ　ādadātiti　dāyādo)
子供または子嗣は、遺産を受け継ぐのに相応しい者である。「継承者が遺産を受け継ぐ行為を担う。これを『遺産の継承』と言う」（Dāyādassa　kammaṁ　dāyajjaṁ）
「法の遺産を受け取る行為を、ここでは『法の遺産の継承』と言う」（Sāsanassa dāyajjaṁ　sāsanadāyajjaṁ）
これはまた「仏の遺産」（Buddhadāyajja、仏陀の伝承を受け入れる行為）とも言う。

先に、「遺産」の性質について述べる。仏法において、二種類の遺産がある。それぞれ「食味財」の利益と「法」である。一人の比丘の四種類の必需品、それぞれ食べ物、衣服、住居及び薬であるが、これを「財食味」の遺産と言う。戒・定・慧の三学は、「戒清浄道」、「心清浄道」等の七清浄道、四念住、四正勤等、37 道品、これらは「法」の遺産と言う。「法」の遺産は、合計二種類ある。それぞれ；
一、世間法の遺産；
二、出世間法の遺産。

戒・定・慧の世間増上学、六種類の世間清浄道、及び世間清浄道と関連する 37 道品、これらはみな「世間法の遺産」と呼ばれる。神聖なる「道」、「果」と関連する「増上学」、超世間的な「智見清浄道」及び 37 種類の出世間的な道品、これらは「出世間法の遺産」と呼ばれる。「世間法の遺産」は、以下のように分類する事ができる：
一、輪廻（＋する時）に依拠する遺産（Vaṭṭa　nissita）：
二、輪廻を離れる時に依拠する遺産(Vivaṭṭa　nissita）。

または以下のように分類する事ができる：
一、決定法の遺産；
二、未決定法の遺産。

戒・定・慧の修習において、世間的な地位、たとえば、名師、国師になりたい、または尊厳、権力、財産の追求、または輪廻の内に神聖な（＋地位）、高位の人類、または天人として生まれたいという場合は、これを「輪廻する時に依拠する遺産」と言う。輪廻の運行する三種類の方式は、すなわち、「煩悩輪廻」、「業輪廻」、「異熟輪廻」で

ある。いわゆる「輪廻から離れる」とは、これらの輪廻の運行を止めて、到達する事のできる「涅槃の境地」の事を言う。戒・定・慧の修習は、輪廻のこの三種類の形式の運行の終止であり、これを「輪廻を離れる時に依拠する遺産」と言う。最終的に涅槃に入るために、善業を修習する。

それはすなわち、涅槃を証得する前の段階における世間的な利益、（＋輪廻による）再生を厭わないなど、すべて「輪廻」及び「輪廻から離れる」事に関連している為、また、「両依止」（ubhaya nissita）とも言う。しかし、パーリ経典では、「輪廻」と「輪廻から離れる」（＋という二つの概念）にしか、触れていない。輪廻（＋に利益あるような修行結果の）証得に（+重点）を置く傾向にある修行者は、「輪廻に依拠する法」を実践していると言えるし、輪廻を離れるという結果に重点を置いている修行者は、「輪廻から離れる為の法に依拠」していると言える。

「決定」と「未決定」の分類については、（＋以下の通りである。）一般の凡夫の「身見随眠」は、巨大な領域であり、それは烈火の燃焼の巨大さと同じで、深い海の様でもある。一般的に凡夫が、たまに修習する所の戒・定・慧は、一粒の雨が、燃え盛る海の中に落ちるようなものであって、「私は戒律を円満した！私は戒律を具足した！私は禅定ができた！私は正覚で（真理を）知った！私は相当の機知に富み、私は『色』と『名』を覚知・察知した！私は『色』と『名』を黙観した！」
などと言うのは、すべて戒・定・慧の行為への露出・自慢であり、それは、「私の」「身見」に惑わされているに過ぎないのである。

それはちょうど、雨の一粒が、烈火のごとくに燃焼する大海の中に落ちるようなものなのである。ちょうど烈火に燃えている大海のように、雨の水滴は乾き、（＋大海の水は）蒸発し尽くす；「身見」の巨大な国土は、この種の戒・定・慧をして作用を失わせしめる。故に、この種の、一般的な凡夫の内に生起する所の戒・定・慧は「未決定」の状態であると言える。一般的な凡夫は、戒・定・慧を擁することはできるが、しかし、それは暫定的なものなのである。

預流聖者の「活命世間戒」は、安定的に、仏法僧の神聖なる無上の特徴の上、及び四聖諦を覚知する「世間智慧」に安住しているが、それらは皆「決定」の段階にあるものである。それはちょうど、雨水が「不退転」（anāvatti）の大きな湖に落ちたようで、どれほど多くの生を重ねようが、この種の世間的戒・定・慧は、消失する事がない。ここにおいて、我々は「世間法の遺産」の性質について解説した。

戒・定・慧の「出世間法」、「智見清浄道」及び八種類の超世間的意識の 37 道品、これらは皆「輪廻を離れる為の依処」である。それらは「決定」（法）である。すでに出世間の戒・定・慧に証入した聖者にとって、世間的戒・定・慧生起する事があるが、それは「決定」の段階に到達しているものである。この種の修行者は、すでに「破戒」をしない、「定を得ない」という事も、「慧に劣る」事もなく、また「暗愚」である事も、あり得ない。ここにおいて、我々は仏法の遺産について説明した。

仏法の継承者は：
一、比丘。
二、比丘尼。
三、沙弥。
四、沙弥尼。
五、式叉摩那。
六、優婆塞。
七、優婆夷
である。

ここにおいて、式叉摩那（sikkhamānā 正学女）は、「比丘尼になろうと準備している女性」の事である。上に述べた七種類の継承者の内、前の五種類は、「仏法の中の追随者または同事」と言う。人、天人と梵天は、「仏法の追随者または同事」ではない。彼らはただ三帰依をうけただけの者であり、その内、優婆塞、優婆夷も同様である。この七種類の継承者の内、前の五種類「仏法における追随者または同事（=中間）」だけが「食財味遺産」の四種類の必要性を継承する事ができる。

しかし、この七種類の継承者は、皆、世間及び出世間の法の遺産を受け取る事ができる。これらの遺産を継承する時、「世間的戒律」に関しては、特殊な考察が必要である。「出世間的戒律」、「世間的＆出世間的禅定」、「世間的＆出世間智慧」もまた、特殊な考察が必要である。「世間的戒律」の特殊な考察とは、前の五種類の「仏法における追随者または同事」は、「毘奈耶戒律」と「経律」を同時に受持するが、優婆塞と優婆夷は、「経律」のみ受持するからである。

いわゆる「経律」とは：
一、「仏法における追随者または同事」は《梵網経》（長部）に列挙される戒・律と関連がある。
二、優婆塞、優婆夷に関しては、「八関斎戒」と「十戒」を言う。「頭陀行戒」、「根戒」と「縁起所依戒」もまた、経律である。

「出世間道」の中の「正語」、「正業」、「正命」は、「出世間戒」と言う。これらの戒・律は、五種類の「仏法における追随者または同事」によって受け継ぐ事ができるし、また、優婆塞、優婆夷によっても受け継ぐ事ができる。ここにおいて、「出世間戒」に関しては、特別な考察はない。定と慧の二種類の遺産もまた、同様である。「七種類の清浄道」と「37 道品」は「戒・定・慧」の中に含まれる。仏法の七種類の継承者の内、前の五種類「仏法における追随者または同事」は、仏法にわが身を捧げる修行者の事を言い、彼らは己の利益の為に、仏法の遺産を見守り、管理する継承者のように、三蔵と、法に関するその他の資糧を、5000 年生き延べさせた。

仏法を見守り、管理する修行者は、仏法を継承する責任を引き受け、その故に（その他の）継承者より位階は上であって、崇高である。こうした事から、60 歳の居士聖者は、わずか 7 歳の、一日前に剃髪得度したばかりの凡夫沙弥に礼拝しなければならないのである。また、このことから、一人の、阿羅漢に証入した比丘は、先ほど、彼の面前で剃髪得度したばかりの凡夫比丘に、礼拝するのである。ここにおいて、我々は、仏法の継承者についての説明を終えた。

「三学」、「七清浄道」、「37 道品」は皆、「九世間法」（四道、四果と涅槃）に相通ずる修行の法門である為、「法随法行道」（dhammānudhamma-paṭipaṭṭi）と呼ばれる。こららの「法」を修習する七種類の法の継承者は、「妙行者」（suppaṭipanna）と呼ばれるが、また「正直行者」（ujuppaṭipanna）とも、「正路行者」（ñāyappaṭipanna）、「和敬行者」（sāmīcippaṭipanna）とも呼ばれる。彼らは凡夫であるかもしれないが、「向預流道修持者（＝預流の悟りに向かって修行する者）」であり、かつ、八聖者の第一番目のグループ（または第一段階）を形成する。彼らはいまだ凡夫であって、「第一義」の聖者ではないが、それでもなお「法随法行道智（ママ）聖者」である。

私は、例を挙げて説明する。《学人行道経》の中で、仏陀は以下のように言う：
「戒蘊の成就によって聖者となれ！」（《相応部》・大品・道相応第一・《学人経》第三）
この経文の意味は、37 道品の中の活命戒の修行を通して、聖者の戒・定・慧を成就せよ、という事である。故に、仏法において、いわゆる優婆塞、優婆夷とは、活命戒、三帰依の内において、持続的に、確乎として修行に取り組む事のできる人、その事によって、部分的にでも「妙行者」、「和敬行者」の特質を享受する者を言うのであり、そのような特質を持つが故に、「法随法行道智聖者」と呼ばれるのである。

これらの特質は、「サンガ」の文字と共に、挙げられているものである。たとえば：「私は僧（＝サンガ）に帰依します。妙行者、世尊、声聞、僧伽（＝サンガ）。」とあ

るように。我々が理解しなければならないのは、比丘、比丘尼だけが、持戒の善良な凡夫である、という事である。毘那奈の中において、具足戒を受けたサンガ以外に、その他の人は、すなわち、沙弥、沙弥尼、式叉摩那、優婆塞、優婆夷である。「法随法行道」（「37 道品」とも）を修習する人、彼または彼女は、ただ、優婆塞、優婆夷の一人にしか過ぎないかも知れないが、しかし《経律》の論述において、「沙門」、「婆羅門」と呼ばれるのである。

故に、《法句経》では以下のように言う：
「厳身住寂静（身は厳しく寂静に住む）
　調御而克制（心を調御して、克己する）
　必然修梵行（梵行を修するは必然であり）
　不以刀杖等（刀・杖等を持って）
　加害諸有情（諸々の有情を害す事無くば）
　彼即婆羅門（彼はすなわち婆羅門であり）
　彼即是沙門（彼はすなわち沙門であり）
　彼即是比丘（彼はすなわち比丘である」
（《法句経》第 142 偈頌）

　この経文は、「法随法行道」（「37 道品」を修習する事）を修持して、心・身が清浄なる修行者は、たとえ凡夫の衣服を纏っていたとしても、比丘と称する事ができる（＋という意味である）。ここにおいて、我々は、仏法の継承者の神聖で崇高な地位についての、説明を終えた。

　仏法における遺産には、二種類ある。それぞれ、善の遺産と、悪の遺産である。継承者にも、二種類ある。善の継承者と、悪の継承者である。ここにおいて、私は《中部》、《根本法門品》、《法嗣経》の、根本的な教義を説明する。
「比丘たちよ。汝らは、我が法を継承するべきである。私の財産を継承してはならない。私は汝らに慰めて、願って言う：『私の弟子たちは、私の法を継ぐのであって、私の財産を継ぐのではない。』」
この経文の意味は以下の通りである：仏陀の遺産は「財の遺産」と、「法の遺産」の二種類がある。「財の遺産」には三種類ある。
それは：
（一）「因縁財」
（二）「世間財」
（三）「輪廻財」である。

食べ物、衣服、住居、医薬などの利益（＝己にとって良いもの）は、「因縁財」と言う。世間的な名声、荘厳、尊厳、権力、世間的地位、教師、国師、部長、富豪で権勢のある者、従者を擁する者、これらは皆、「世間財」である。楽しい輪廻、たとえば、比較的高位の地位に輪廻する、裕福な家庭に輪廻する、欲しい物はなんでも手に入る環境に輪廻する、これらは皆「輪廻財」である。「法の遺産」に関しては、私はすでに説明を終えた。

仏陀はすでに予見した。彼が涅槃に証入した後、仏法はこれら三種類の「財の遺産」の極端な成長・強化によって圧倒されるであろうと。それはちょうど大海の中の島嶼が、三度の洪水で水没してしまうようなものである。故に、仏陀は以下のような警句を残したのである：
「比丘たちよ。汝らは、私の法を継承すべし。私の財を継承してはならない」。

「憐憫」（Anukampā）は、仏陀の憂慮と心配を表している。仏陀が憂慮したのは、大海の洪水が顕現する時、島の上に住む人々は、洪水の衝撃により、四方八方に漂流する。「財の遺産」が生起して、拡張する時、仏法における弟子たちは、侵入されて、行くあてが無くなり、その結果、「法の遺産」の継承は阻害される。故に、仏法（ママ）に以下のような警句が残された：
「私の弟子たちよ。私の法を継承するべきであって、私の財を継承してはならない。」

故に、この三種類の「財の遺産」は、仏陀の憂慮と心配を生じせしめた・・・これは仏陀をして悲しみを感じせしめる遺産である。そういうことで、この三種類の「財の遺産」は、悪い遺産である。その他に、37 道品、たとえば「四念住」などは、仏陀の讃嘆し許可するものであって、浄化された心霊が、憂慮の中から解脱することができる遺産である。こうした事から、これは善の遺産である。

我々はすでに、善の遺産と悪い遺産について説明したので、次に、善の継承者と悪の継承者について述べる。特に記憶するべき事は、「財の遺産」の中の幾つかの遺産は、仏陀の讃嘆を得ているものがあることである。それらは
「一団食」（piṇḍiyālopa）、
「糞掃衣」（paṁsukūla）、
「樹下住」（rukkhamūla）、
「陳棄薬」（尿を酸化させて作った薬）で、
この四種類の「財の遺産」は、「仏陀の遺産」（buddhadāyajja）といい、それらは仏陀が許した、四種類の偉大な伝統である。上のような状況の下において、我々は仏陀が

なぜ通常の布施者が布施する所の「余財」（atireka　lābha）を受け取る（＋のを善しとする）のかを理解することができる。

仏陀は以下のように言う：
「余っている寺院、住居や地点（＝場所）などなど（＋を受け取ることができる。）」。
「経律論三蔵」を含む所の「聖典の学習」（pariyatti-sāsanā）は、「修持法」と「仏法の実現」の基礎となる。唯一「聖典の学習」が安立した時にのみ、その他の二種類の仏法もまた、確固なものとなることができる。現在は「劫」が微弱な時代である。
人の生命時間は、減少している。それ故に、「聖典の学習」を、5000 年にわたり護持してきた事は、真に偉大である。身を仏法に捧げた者（＝貢献者）とその護持者、これら僧侶たちの心身の強度もまた、弱まりつつある。故に、仏陀は予見したのである。
これら貢献者と、護持者が未来において、「聖典」を護持し、樹木の下で単独で住み、「余財」に妥協しない事は、不可能である事を。これが理由の一つである。

修行における資糧に不足する人間について、仏陀は予見した為に、以下の様な事柄を用意した、すなわち、広く「聖典の学習」をする事、布施、持戒、資糧の提供などなど、未来において、彼らが苦界から解脱できるように保証し、かつ、次の仏法の段階において、世間的な痛苦から解脱できるようにしたのである。これがもう一つの理由である。
ここにおいて、我々は以下のように言う事ができる。上に述べた事柄が事実であれば、それは、仏陀が己自ら、巧妙に衆生を済度しようとし、彼らが「財の遺産」の中で流転するのを、避ける事ができる様に、したのである。この点について、私は特別に（＋以下の事柄を）、指摘したいと思う。というのも、「聖典の学習」の貢献者と護持者は、「助縁財」、「世間財」と関連しないでは、いられないからである。

「財の貪欲」に沈潜しないように、仏陀の開示した所の教え、及び、残された「浄の観察」（paccavekkhaṇa　suddhi）の修行の法門、たとえば「衣の如理観察」などは、重視されなければならない。こういう事から、修行者は「浄の観察」の実践方法の取り決めから、「資具依止戒律に依って想う所の智慧」を生起せしめるならば、この智慧の船に乗って、二種類の「財の貪欲」から解脱することができる。たとえ彼らが「財の貪欲」の中において生活せざるを得なくても、「財」の大海に沈潜したり、漂ったりする事はない。

いわゆる「沈潜」や「漂う」等の、それらの意味は：「資糧財」、「世間財」、「因縁財」という、この三種類の財の中で、「過失の察知の智慧」を失ってしまうのを、「沈潜」と言う。長期的に過失を察知する能力に欠ける時、生命の三つの段階を経過する途中において、この三種類の財の内に、楽を享受する。これがいわゆる「漂う」である。

いわゆる「沈潜」「漂う」を防止するために、仏陀は《法句経》の中において、以下のように言う：
「三時の中の一時、智者は目覚めておれ！」（157 偈頌）
これはもし、一人の修行者が、生命の第一の段階において「沈潜」し、「漂った」のであるならば、第二の生命の期間において、自我の浄化に努めなければならない。しかし、もし、一人の修行者が、生命の第二の段階において「沈潜」し、「漂った」のであるならば、生命の第三の期間において、自我の浄化に努めなければならない、という意味である。

ここにおいて、いわゆる「自我の浄化」とは、「財の遺産」への執着から抜け出した後、「37 道品」において、安立する事を言う。これはまた、「四種類の聖者の財法」の内に、自我を安立させる事でもあるが、それは以下の通りに、分類することができる。
衣寂静：衣において、容易に満足する。
乞食寂静：托鉢する上において、容易に満足する。
住居寂静：住居において、容易に満足する。
修習の楽：瞑想の修習において、喜楽が生じる。

仏陀は言う：もし、一人の人間が、生命の三つの時期において、「財の遺産」の内に、常に「沈潜」し、「漂う」ならば、彼は「苦界」の中に打ち捨てられる、と。故に、仏陀は《法句経》の中で、言う：
「如鉄自生錆（鉄が自ら錆を生じるように）生已自腐蝕（生はすでに、自ら腐蝕する）。犯罪者亦爾（罪を犯す者もまたしかりであり）、自業導悪趣（自業によって悪趣に導かれる）。」（240 偈頌）

この部分の、仏陀の開示（《法句経註疏》第三・Tissa-tthera-vatthu）参照の事）では、祇樹給孤独園で亡くなった、比丘の事に触れられている。この比丘が臨終の時、己の衣に執着したが為に、次の生では、寄生虫に生まれ変わり、己の衣に宿った。このように、一枚の衣に執着する事でさえも、一人の修行者をして、苦界の中に落ち込ませるのであれば、更に巨大な執着においては、何を語ればよいのであろうか？（＋比丘の）衣は、サンガの共有財産と見做すべきであり、そうであれば、それは、法的財産という事になる。

問題を起したこの比丘は、227 条の毘奈耶学戒を細心に護持していた、修行者であった。こうした事から、一枚の衣は、227 条の学戒を具足していた比丘を、苦界に落とし込める事ができるのだ、という事が分かる。そうであるならば、五戒しか受けない一般の凡夫は、財物に対して大いに貪愛、嫉妬を充満させており・・・では、その（＋人生

の）結果は、如何ばかりか。私からは、説明するに及ばないであろう。こうした事から、一人の修行者は、「厭離心」（saṁvega）（世界の悲・苦を観想する事によって生起する恐怖心）を観想し、かつそれを希求しなければならない。

仏法の継承者は、以下のように分類する事もできる：
一、「決定」された継承者；
二、「未決定」の継承者。

自分自身の内にいまだ「無常智」と「無我智」が証得されていない修行者は、いわゆる「未定」の継承者に相当する。「未定」とは、彼らは、今日は「一切智仏」の弟子、または「一切智仏」の継承者であり得るが、しかし、彼らは、明日には、一人の導師の弟子または継承者になり、「一切智仏」の仏法を軽侮し、破壊的行為する、という意味である。今日、ある種の修行者においては、仏教の信仰から、キリスト教へ信仰を変更し、仏法を軽蔑し、ひそかに仏法を破壊する者がいる。これらの修行者は、死後、転生した後、また再び簡単に転変するであろう。この事は想像に難くない。

一人の修行者は、今月は「一切智仏」の弟子であり、次の月にはもう一人の導師の弟子でありえる；今年は「一切智仏」の弟子であり、来年はもう一人の導師の弟子であり；生命の第一番目の時期においては「一切智仏」の弟子であり、生命の二番目の時期においては、もう一人別の導師の弟子であり；生命の二番目の時期においては「一切智仏」の弟子であり、しかし、三番目の時期においては、もう一人別の導師の弟子であり得る；今生は「一切智仏」の弟子であり、継承者であっても、来世においては、もう一人別の導師の弟子であったりする。故に、仏陀は《無礙解脱論》の中で以下のように言う：
「凡夫の、凡夫と呼ばれる所以は、彼が多くの導師の顔を見過ぎる為である。」
（《無礙解脱道註疏》第 9・Saṅkhārupekkhā-ñāṇaniddesa-vaṇṇanā）

上の句の意味は、過去無数の輪廻の中において、通常の凡夫は、恒常的に一人の帰依すべき導師を選ぶ事はなく、今日はこの人を導師とし、明日は別の人を導師とする；今年はこの人を導師とし、来年は別の導師に帰依する；今生ではこの人を導師とし、来世では、もう一人別の導師に帰依する。過去の無数の輪廻の内において、「一切智仏」に親しみ、帰依する機会というのは、非常に少ない。ある時には、彼らは「梵天」に帰依し、ある時には「帝釈天」に帰依し、ある時には「諸天」に帰依し、ある時には太陽に帰依し、ある時には月に帰依し、ある時には星に帰依し、ある時には大地の神々に帰依し、ある時には魔・鬼（=亡霊）に帰依する。彼らがこのようにするのは、帰依した対象が、全能であるような感じがする、からに他ならない。

この世界では、錯誤の、間違った所の導師は非常に多い。多くの凡夫は、彼らに親しみ、かつ彼らに帰依する。
ある時には、彼らは「龍」に帰依し；
ある時には、彼らは「キンナラ」（鳥）に帰依し；
ある時には河の流れに帰依し；
ある時には山に帰依し；
ある時には火に帰依し；
ある時には水に帰依する（《法句経》188 偈頌）。

このように、「身見」にさいなまれている凡夫、彼らが親しむ導師の種類、数は、当然に、非常に多くなるのである。彼らが、錯誤・間違った導師により多く親しみ、より多く帰依すればするほど、彼らは苦界と地獄に落ち込むのである。更に一歩進んで話すならば、もし、今生から始めて、彼らが輪廻の内に漂流し、かつ、（＋その生において）「身見」への錯誤と執着を充満させるならば、彼らは、更に絶え間なく己自身の親しむべき導師、帰依する導師を変更し続けるのである。通常の凡夫の境涯は、如何に驚くべきものであるか、恐ろしいものであるか、穢れているものであるか！これ（＝上記の事）こそが、「凡夫の、凡夫と呼ばれる所以は、彼が多くの導師の顔を見過ぎる為である。」という句の意味である。

毎回、凡夫が己の導師と帰依の対象を変更する度に、彼の依拠する理論と原則もまた、変化する。ある時には、凡夫は「一切智仏」が制定した「増上戒」に依拠する事もあれば、ある時には「一切智仏」の「牛戒」（gosīla）に依拠するか、または牛の規範に依拠する事もある；ある時には、犬の規範に依拠し、ある時には、象の規範に依拠する。こういう事から、彼らが採用し、依拠する所の倫理規範の範囲は、非常に雑多なものとなる。「見」の角度から言えば、衆生が採用し、依拠する所の「正見」は非常に希で、少ない。反対に、衆生が採用し、依拠する所の「邪見」は、非常に雑多である。採用し、依拠する所の「邪見」と規範が、多ければ多いほど、彼らは益々、苦界・地獄へと、落ちて行くのである。

凡夫が擁する所の、無尽の錯誤と独断によって、彼らが輪廻の内に漂う時に犯す最大の過ちは、誤った導師に帰依する事である。この種の過ちは、彼らに巨大な傷害を齎すのである。というのも、一人の誤った導師に帰依する事は、間違った倫理原則と規範を生起せしめ、かつ、再度人類に生まれるのが、非常に、難しくなるのである。この事は、ちょうど「希望の木」（padesā）が、元々は、善の果実を実らせるものであるのに、完全に地獄において成長した為に、悪の果実を生じせしめるのと同じである。ここにお

いて、我々は仏法の内における「未定」の継承者の、未来の行く末についての、説明を終えた。

己の内に、「無常」と「無我」の特質を察知することのできる修行者は、「身見」の王国から解脱することができ、そのことによって、仏法の内の「決定」的継承者になることができる。いわゆる「決定」とは、未来における、無尽の輪廻の中で、これらの修行者は、誤まった指導者を求めたり、依止したりする疑念から解脱することができる、という意味である。未来における一連の再生において、彼らは「一切智仏」の真正なる子孫となり、「初級レベルの預流聖者」の家族の一員になることができる。彼らにおいては、いまだ多くの、累劫の輪廻を重ねなければならないが、しかし、彼らの、仏・法・僧における、無限の、比較できない程（＋優れた）特質に対する観照は、一世より更に次の一世へと、明晰を増していき、益々明瞭に、明るくなっていくのである。

戒・定・慧の三学、「戒清浄」等の「七清浄道」及び「念住」、「正勤」、「如意足」、「精進」、「力」、「菩提支」、「道」の「37 道品」はみな、法の遺産であり、生々世々、代々彼らの内心で日ごとに豊かになって行く。彼らについて言えば、「聖典」、「行道」、「洞察」の三学は、多くの累劫を経てもなお、持続的に強化されていく。

彼らは、いまだ輪廻の中において、人類、天人、梵天の楽しさを享受してはいるが、彼らは、己の導師を変更しないし、帰依（＋の対象）も変更しない。出世間または聖者の領域にある衆生は、なお、輪廻の内に漂流するが、しかし、彼らは、二度と再び、輪廻の悲しみと苦しみの輪が彼らに影響を与える事はないし、回転する巨大な輪の中で、沈み、窒息し、困窮し、漂流する事はない。彼らはすでに、涅槃の第一段階――いわゆる「有余涅槃」の真実なる衆生である。

「初級レベルの預流」聖者の楽しい生命の形態を経て、彼らは必然的に「無余涅槃」の境地に到達することができる。止まる事を知らない輪廻の内に、すべての智者、天人、梵天は、唯一「一切智仏」の真正なる子孫になることによってしか、「決定」の衆生になる事はできないし、そのようにして初めて、仏法僧に会うという希望も生まれる。彼らは戒律を受持する必要がある。というのも、この種の行為を通して、仏法僧に会える事を望んでいるが為に。ここにおいて、我々は仏法における「決定」の継承者は、正道を離れてはならないのだ、という説明を終えた。

仏陀は《経蔵》、《論蔵》の中で、この道に関して、何度も言及している。彼は以下のように言う：
「三結の縛を解いたために、この修行者は、『37 道品』の継承者となった。彼は更に高いレベルの道果において、止息した。」

（三結の縛とは、「身見」、「疑」と「戒禁取」である；その内、「身見」は根本的な、または主動的な要素である）ここにおいて、我々は「未定」の継承者と「決定」の継承者に関する説明を終えた。

善良で有徳なる修行者は、善の遺産とは何か、悪の資産とは何か？何が「決定」の遺産で、何が「未決定」の遺産か？何が善の継承者で、何が悪の継承であるか？を察知することができる。これら善良なる有徳の修行者が、仏法の内における悪の遺産の継承者になりたいと渇望するならば、彼らは、過去の累劫の（＋人生）の中で、（＋よき）努力は払わなかったに違いない；ただ只管、善の遺産の継承者になりたいと願って、彼らは、努力してきたのである；もし、彼らが「未決定」の、暫定的な遺産の継承者になりたいのであれば、彼らは布施、戒律と禅定の修行を実践したりはしない。彼らは「決定」の継承者になりたいが故に、（布施、戒律と禅定を修持するのである）。

すでに存在する事実をもって、子細に観察するならば、仏陀の弟子となって、その継承者とならなんとする修行者に対して、仏陀は、悪の継承者になるように、己を暫定的な「未決法」の継承者になるようにとは、勧めてはいない。このことから、仏陀は悪の遺産に反対している事が分かる。これらの修行者は「37 道品」という、この種の善の遺産の継承者となる為に、また、「決定法」の継承者になる為に、努力しなければならない。

多くの生における累劫の輪廻の中で、いつ、布施、戒律と禅修の修行をしたかにかかわらず、通常、衆生はこれらの善の行為を通して、来世において、人類に転生した時に、仏陀に会って、世間的な痛苦から解脱したいという希望、または「道智」、「果智」と涅槃を証得できるようになりたい、という希望を持っている。故に、彼らにとっては、「法」の遺産を希求する事は、気持ちの和む、当然の事である。しかし、これらの行為を通して、未来の生において、仏陀に会える事、また世間的な富と地位を獲得する事、この事は非常に希な出来事なのである。彼らにとって、「財の遺産」を得たいと言う希望は非常に薄く、これらの善行為でもって、「成就の獲得」「財の成就」「自在の成就」を得る機会を願う事もない。

しかし、今日においては「助縁貪欲」、「世間貪欲」、「輪廻財貪欲」という、これら悪の遺産が、主導的な要因、（＋人生の動機）になっている。現代の男女は、上記三種類の貪欲と相反する「四つの聖種法」を、聞きたいとは思わない。先にあげた「四つの聖種法」は、非常に容易に食・衣・住において、満足するものであり、また、「禅定」の修行の内に喜悦と楽しみを得る事ができるものである。「四つの聖種法」を、まさに「四つの聖種法」と呼ぶその所以は、諸仏、仏弟子及び仏の継承者が、捨て去る事の出

来ない法門であるから、である。ここにおいて（+私は）、すでに智慧を具足した修行者に対して、注意を促したものである。智慧の方面において、瑕疵のある修行者に関しては、ただ大量の善事をなしさえすれば、善良なる修行者と呼ぶ事ができる。

しかし、すでに智慧を具足した修行者に関して言えば、もし、今生において、または来世において、天界に生まれて「決定法」の継承者になりたいと思うのであれば、「活命戒」を受持し、「四念住」を安立し、かつ（一日の内、最低でも三時間）心身の五蘊の上において、三法印の省察を、完成させなければならない。もし、彼らが、五蘊の上において、三法印を省察する事ができるならば、「決定」の継承者となる事が出来、また「初級レベルの預流聖者」に到達することができる。（＋以上の事柄に興味ある人は）拙著《諸相ハンドブック》、《明智道ハンドブック》、《飲食ハンドブック》、《第一義諦ハンドブック》を参照されたい。「決定」の「初級レベル預流聖者」の道を行くためには、《四聖諦ハンドブック》及び《第一義諦灯炬》の中の、涅槃に関連する章節を参照の事。

＜付録一＞ 第十一章　「無我」を証入する利益

今、私は「無我」を証入した時に生起する利益について、説明する。もし、一人の修行者が、明確に「無我」の特徴を覚知する事ができたならば、彼は「預流果」の境地に到達することができ、その事によって「我見」または「身見」を断じ除くことができる。

◎「無我」の証入と過去の業

尽きる事のない、長い輪廻の中において流転する衆生が、仏教に出会う事は非常に希な事である。百千万劫の中において、彼らはいつも仏教に出会うことなく、仏陀の教えを聞く事もない。無数の世と劫数の中において、衆生は先の悪業と過ちによって苦しむ。故に、衆生の作意・思惟の中において、これら無数の業は、常に彼らをして、無間地獄に落ちらせしめる。同様に、これら尽きる事のない業もまた、彼らをして、等活地獄及びその他の地獄に落ちらせしめるか、または、餓鬼、阿修羅、畜生などの方式でもって再生する。

「我見」は旧い悪業の首領であり、故に、持続的に、衆生の上に、付いて回る。「身見」が存在していさえすれば、これらの旧い悪業は、非常に猛烈に、力を充満させる。衆生は、六天界の天神または帝釈天のように、享楽を思い切り楽しむ事はできるが、しかし、最後には、四つの苦界に落ち込むことになる。同様に、衆生は、色梵天、無色梵天において、享楽を思い切り楽しむことはできるが、最後には、四つの苦界に落ち込むことになる。棕櫚の木の実は、木のてっぺんに成っているが、しかし、その実は、いつかは地面に落ちてくる。棕櫚の木が、まっすぐに立っているかぎり、実は木の上にあるが、しかし、木が枯れるやいなや、実は、地面に落ちざるを得ないのである。

同様に天神、梵天の命「木の幹」が健在・無欠であるならば、天人、梵天は、天界または梵天界に生まれて、「我見」に苦しまなければならない。これらの生命「木の幹」が折れたならば、彼らは必ず、低層の苦界に落ちざるを得ない・・・ちょうど、木の実が、いつかは地面に落ちるが如くに。「身見」は衆生の作意・思惟の中に、頻繁に出てくるが、「身見」が齎す苦悩は、摩奴大山よりなお巨大である。というのも、「身見」は意識の中にあって、無窮の悪業を聚合するが故に。

こうした事から、衆生は、たとえ最高の梵天界に生まれたとしても、「身見」に関する作意・思惟がいまだ存在する限り、引き続き、苦界において苦しむ事になる。低層の梵天界または天神界における生活、人類としての衆生の生活は、もっと酷いものである事は、言うまでもない。これらの衆生は、梵天王であったり、天神王であったり、または帝釈天王であたりするかも知れないが、彼らの作意・思惟には、八層の地獄が含まれている。同様に、彼らの作意・思惟は、無数の低層の地獄、餓鬼道、阿修羅道と畜生道も含まれている。その原因は、これらの衆生が、低層レベル（＋の世界の傾向）、また貪欲で吝嗇の世界の傾向が、恒常、彼らの作意・思惟の中に顕現している事を知らないからである。そうであるのに、梵天王及び天神王は、これらの境界の中で、快楽を追い求めているのである。

旧い悪業の首領である所の「身見」が、完全に断じ除かれた時、衆生に付き従い、止まる事の知らない輪廻の内の一切の旧い悪業は、その時初めて、徹底的に滅し去るのである。前世に従って付いてきた旧い悪業は言うまでもなく、今生で行った無数の悪業、たとえば、殺生、盗みの業などは、唯一「身見」が完全に断じ除かれた時初めて、彼らの（＋悪の）果報もまた、徹底的に消失するのである。この事を人類に即して言えば、（＋「身見」を断じ除いた人は）なお虫を恐れ、昆虫を恐れたりするものの、尽きる事のない悪業の果報に怯え、懼れる必要は、なくなるのである。

過去に（＋蓄積された）無数の業は、「身見」の消滅した刹那に、効力が発生しなくなるのは、何故であるか？　以下に例を挙げて、説明する：
「一連の数珠は、しっかりした強固な糸によって貫かれており、それ故に、無数の数珠は繋がっている。もし、その中の一粒の数珠が引っ張られれば、その他の数珠もまた、一緒に引っ張られて、動く。しかし、もし、この糸を抜いてしまった後に、数珠の一粒を動かしたならば、その他の数珠は、影響を受けない。この事は、それら（＋各々の数珠）の間に、如何なる関連もなくなったが故である。」

「身見」に執着する衆生は、過去生と劫数の内に、一系列の「蘊」について、強くて力のある関連性を与え、かつそれを、「私」（＋という自我意識）に転化する。
「過去世と過去の劫の内に、私は何度も人類、天神または梵天に転生した！」
彼が、このように思惟するという事は、「身見」を貫く「糸」を求めている、という事である。故に、過去世と劫の内に犯した無数の悪業、及び未だ応報していない悪業は、彼の再びの転生に伴って、彼に付随してくるのである。これら過去の悪業は、ちょうど一つながりに繋がった数珠のように、一本の強力な糸によって、連結されている。

衆生が、はっきりと明晰に「無我」を覚知して、かつ「身見」を断じ除くならば・・・。少なくとも一炷、一堂の瞑想・座禅の内に、「色蘊」と「名蘊」の生起と消失、及びそれらの分離の現象を覚知し、（＋それらは）連結された統一体ではないという事を知る事ができたならば（＋衆生の持つ問題・誤解は、解決する）。（＋そうなれば）「自我（＝私）」という概念は、ちょうど一本の糸のようであって、それは（＋衆生の上に）二度と現前する事はない。

諸蘊は、ちょうど糸を抜いた後の数珠のように、四方八方に散る。彼ら衆生には、はっきりと明晰に、過去に犯した悪業が、「個体」、「衆生」、「私」または「私の業」ではありえない・・・それらは刹那に生起し、かつ刹那に消滅している（＋のだという事が分かる）。これが、なぜ、「身見」が消失した時、過去の悪業もまた、完全に消失するのか、という答えである。以上、我々は、悪業の消失を観察する（＋事に関する説明をした）。しかし、ただ「身見」を断じ除くだけでは、過去の悪業は消失しない。唯一、阿羅漢道に到達して、愛欲が徹底的に根絶される時、その時初めて、悪業は、完全に断じ除かれるのである。

◎「身見」の罪悪

「身見」の悪は、極端で深刻であり、その影響は、深遠である。一人の、母親殺しの業行を犯した人は、必ず、無間地獄の境界相に落ちて、怯え震える。そして、母親殺しの業行を「自我」に転化して、かつ「私は間違いを犯した！私は本当に間違いを犯した！」

等の、その種の＜思い＞の、巨大な苦悩に、深く影響される。もし、この衆生が完全に「無我」を体験・証悟し、かつ、「私は本当に間違いを犯した！」という考えを放棄する事ができたならば、母親殺しの業行は、二度と作用を発揮しない。しかし、衆生において、この種の考えを断じ除くことは、非常に難しい。業は意なくも、衆生に随伴し、また、（＋業には）業果を生じようという意もないのではあるが、衆生が「これは私の犯した業である。これは私の業である」という風に執着するが故に、（＋思いが）強化されてしまう。

実は、この種の、強くて力のある執着的な行為によって、業は果報を、生じせしめるのである。世俗の人々は、この種の方式でもって、迷いと惑いを受け、「身見」に執着するのである。悪業もまた同様であって、「身見」という強くて力のある執着的行為によって、悪業は輪廻を通して、衆生に随伴し、彼らはその為に再生し、かつ、業報を生じせしめる。衆生は、彼らが業果の圧迫を受けて、巨大な苦難の過程の中にある事を発見しても、彼らは悪業を止めたり、捨てたりする事はない。これらの衆生は、悪業をば「私のなした悪業」と見做して、それらに執着し、たとえ地獄にいたとしても、業から生じる所の苦果を、受け取るのである。

衆生が、これらの悪業を捨て去らないが故に、これらの業は、何等の利益にならないばかりか、却って果報を齎す。これらの業は、絶え間なく果報を生じるため、これらの衆生は、地獄から抜け出す事ができない。これが「身見」における、罪悪の深くて重い所以なのである。同様に、衆生は極端に疾病、老化と死に恐怖する。しかし、彼らは、この種の懼れを受け入れるが故に、却って、過去の思いがけない事象の中に発生した所の疾病、老化と死に執着し、次のように考えるのである：「過去において、私はすでに何度も病、老化、死を体験した。」そして、彼らは、この種の恐ろしい現象を打ち捨てることはできない、という事を発見する。彼らは、疾病、老化と死の現象を打ち捨てる事ができないが故に、却って、それらに随伴し、それらに抵抗・反抗するが、そのことによって、持続的に圧力（＝ストレス）を生じせしめているのである。疾病、老化と死の現象は、必ずや出現するものであって、これこそが「身見」の罪悪の深重なる所以なのである。

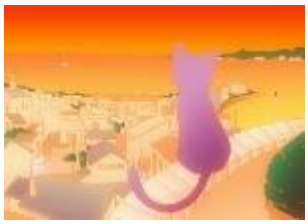
今生もまた同様である。外部のまたは内部の禍が現前する時、衆生は疾病によって大きく圧迫されるが、彼らは、却って、疾病に対して、執着という態度に出て、以下のように考える:「私は苦痛を感じている。私は傷付いた。私は傷の痛みに圧迫されている。」として、それら（＋の現象に対して）執着する。この種の執着的な行為は、一種、束縛的な行為であり、彼らが疾病から抜け出す契機を、阻害するものである。これは「身見」によって束縛される所の行為が、如何に猛烈である（＋かという証左でもあるが）、長

くて、止まることの知らない輪廻の中において、（＋衆生は）これら疾病は、己とは不可分の伴侶であると見做し、その為（＋病は）今生まで引き続く事になるのである。

こういう事から、「身見」は、これら疾病の内に、一種の＜絆＞を造りだして、今生においても、衆生を、大きく圧迫しているのである。これらの巨大な禍と痛苦自体は、これら衆生に随伴したい、という意は持たないし、また、（＋衆生にとって苦痛である所の）状況を、そのまま保とうという意も持たないのではあるが、しかし、「身見」の牽引によって、（＋老・病・死は）一世また一世と、衆生に随伴することになるのである。

来世もまた同様である。衆生は以下のように思惟する：「我々は疾病を経験するだろう。我々は老化するだろう。我々は死ぬだろう。」と。これら「身見」による行為は、この時から始まって、未来における疾病、老化、死の可能性に執着し、それらを衆生は受け入れてしまうのである。故に、この種の束縛的行為は、打ち砕かれることなく、却って未来において確実にその姿を現す事になるのである。これが「身見」の罪悪の深重たる所以である。以上、「身見」の罪悪が如何に深重であるかを、述べた。

◎表面的な執着と深い所での執着

「愛欲」と「慢」の執着は、「見」の執着ではない。「愛欲」は「これは私はの財産である」という形式を取り、三界の内の一切の現象に執着する。「慢」は、「これは私である」という形式でもって、一切の現象に執着する。衆生が「身見」に執着する事例の中で、「愛欲」と「慢」は、「身見」が切り開いた道を追いかけているのである。預流果、一来果、不還果聖者の例では、彼らはすでに「身見」を断じ除いているが、「愛欲」と「慢」は、「想顛倒」と「心顛倒」に追随して（＋生起する）。「想顛倒」と「心顛倒」によって生じる執着は、表面的なものであり、「身見」によって生じる執着は深い（＋所から生起する）ものである。以上、我々は、悪業総体が、「身見」の消滅と共に、如何にして止息するかの説明をした。これにて、筆を置く。

（翻訳完了）